
ことみの中のこういち～改訂版～

ヒロヒト.JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ことみの中のこういち 改訂版

【Nコード】

N2969B

【作者名】

ヒロヒト・JJ

【あらすじ】

奇想天外小説。ある日、主人公が苦し紛れに目覚めると、そこは予想もつかない場所だった。そこは産婦人科で、しかも自分は大きな胸の中で抱かれていて、ようやく自身が赤ん坊として生まれ変わったことに気づく。しかも前世の記憶をそのままに、今度は性別の違う女の子としてだった。更に衝撃的なことに、今自分を産んでくれた母親らしき女性は、前世で自分の恋人だった女性。これから自分はどう生きていけばいいのか。なぜこんなことになったのか。そんな複雑な心境の中、トラブルを起こしながらも女の子として、保育

園や小・中学校へと徐々に成長してゆく自分。しかし、体に異変が
起きはじめ、そのまま思春期を迎えて新たな展開に。。。

プロローグ 10話

プロローグ

どこにでもいるごく普通の同棲カップル。

青年の方はやや威勢がよく、ケンカっ早いところもある。

だからといって、凶暴でもなければ目立ちたがり屋というわけでもなく、単なる性格的なものにすぎない。

一方、その彼女の方といえば、活発で明るい子という、とってつけたような定番評価がびったりくる平凡な女性。

とびきりの美人ではないけれど、彼女の人懐こさや個性的なしぐさが、青年にとってはとてもチャーミングに思えた。

共働きではあったが、若い二人の稼ぎなど知れたもの。月々の家賃と生活費でギリギリの暮らし。

だが二人とも幸せだった。常にプラス思考で考える二人は、若いなりに苦労をバネに生きるすべを知っていた。

青年は、自分の彼女に対してまだ“結婚”という言葉を口にしていない。

でも彼は、着々とその準備と時期を考え始めていたのである。

——そんな矢先、青年の身に起こった不慮の交通事故。
ひとり絶望に立たされた彼女。

未来ある二人の運命は、その彼の死によりあっけなく潰^{つぶ}えたかに思えた。

この物語は、その8か月後から始まる——

第1話 2度目の人生

俺は心地良い眠りから覚めた。というか、突然邪魔が入って起こされたようだ。でもそれだけではすまなかった。廻りからのすごい圧迫感。

特に頭を上につ張られているようですごく痛い。

やめてくれよ。。一体誰なんだよ。。痛いってばっ！

そう言おうと思ってもなぜか口が思うように動かない。もう泣きそうだ。

この引っ張り方って何なんだ？バキュームのようなもんで吸い込まれてるような。。首が伸びるじゃねえかよぉ！

俺は我慢できずに泣いた。大声で泣かずにはいられなかった。

——そしてどのくらいたつたろう。

長く思えたが実際は数分だったかもしれない。俺は頭の圧迫から開放され、広い空間の中に放り出された感覚に陥った。でもまだ俺は泣き止まないでいた。たしかに頭からは開放されたが、次に顔中体中、タオルでこすられているようだ。全身いじくられ、むずがゆいやら痛いやらで、もう“いい加減にしてくれ状態”だった。

それもしおさまった頃、ようやく俺も少しは冷静になってきた。でも

なぜか目が見えない。おいおい、俺は失明したのか？一体俺に何が起きてる？そうこう思いあぐねているうちに、廻りの声が聴こえるようになってきた。

「ほらほら、ママでちゅよ〜いい子いい子」

ん？何？どうゆうこと？今の俺の想像する状態と言えば、大きな腕の中に抱かれているような…そして顔に当たる触感、あたたかくて柔らかな乳房のような…いや、これはきつと乳房だ！間違いなく乳房だ！

ってことはなにその……俺って今赤ちゃん？Σ―11（　　；）

――1

なんでだあああああああああ〜！！

今の俺には歯がないし、体も未発達で目も見えず、言葉を発しようにも声にならない。ただ泣くだけであつた。

「おーよちよち、また泣いちゃってえ、ほんと元気な子ね〜」

母親と思える人がこんなことを言っている。何も元気じゃない。やりきれない気持ちを抑えられず、泣いているのだ。

この状態、いつまで続くんだろう。夢であつてほしい。次の瞬間にでも元に戻ってほしい。そう思いつつ、俺はハッと気づいた。

俺……そういえば死んだんだった。

ってことはだ。てことは…もしかして俺って生まれ変わった？マジで？

そうこう思い悩んでいる最中、助産婦さんらしい女性の声が聞こえた。

「口元と鼻がママに似てかわいい女の子ですね〜」

げえええええええええ！！俺って女かよおおお！！

。 一体俺の新たに始まるうとしている人生はどうなっていくのだろう。

こんな前世の記憶を持ったままで。。

俺がそのうちいきなりしゃべり出しても、天才バカボンのハジメちゃんじゃあるまいし。周囲を混乱させない程度に生きていかなきゃならんのか？

それにしてもとりあえず、目が見えるように早くなってほしいもんだ。

今、俺を産んだ母親ってどんな人だろう？

戸惑いもあるが、ちょっとこれからが楽しみにもなってきた。

第2話 産婦人科にて

どのくらい時間がたつたんだろう？

今の俺といえば、母親らしき人に抱かれては寝かされ、再び抱かれては寝かされの繰り返しだった。それに俺自身も何度寝てもすぐに眠れるのだ。

以前の自分は毎日睡眠時間が5時間くらいだったから、そのツケが今来ているのだろうか？ いや、そうではない。赤ん坊は寝れるもんなのだろう。それが仕事のようなもんだ。

そんな中、誰か来客が部屋に入って来たようだった。

「美香、よく頑張ったね！おめでとうー！体の調子はどうだい？」

「うん。ちょっときつかったけど、今は回復したよお母さん」

げっ！この人が俺の婆ちゃんになるのか。。

しかも、この母親らしき人は美香っていうのか。

「どれどれ抱かせてちょうだい。」と俺は譲り渡された。

「その次はわしの番だからな。」とまた違う声。

うげっ！じいさんも来てたのか。

「おーよちよち。ほら、ばあちゃんのおっぱい吸うかい？」

おいおい、いくら冗談でも言わないでくれ。想像したら具合悪くなる。

俺のそんな心のうちをよそに、無理矢理この婆さんが俺の顔を自分の胸に押し付けてきた。もう泣いてやるしかない。

「あらら、泣いちゃった泣いちゃった。ほら、今度はおじいちゃんよ」

げっ！よけい気色わるっ！！

「おお、利口そうな子だあ。さすが俺の孫だ」

年配の言いそうな決まりきったセリフを言ったあと、じいさんはいきなり俺にキスをしまくってきた。

おえええええ！じじい、くせえよっ！ニンニクくせえ！

孫に会うのに変なもん食つて来てんじゃねえよお！

俺は再び、泣くしかなかった。

「おじいちゃん、なんかニク臭いよ？」

「おっと、ごめんごめん。そうなんだ。それ食べてきたんだよ。」

ほれみ。身内からもバレてやがる。

「お腹がすいてるのかもしれない。母乳あげよっかな」

母親らしき人がそう言うのと、俺はまたもや道具のように譲り渡され、乳房に口をあてがわれた。

俺は生まれてこの方、この瞬間だけが大好きだった。母親の乳首をちゅうちゅう吸っている瞬間。大人だった頃、このような瞬間は恋人と愛し合っているときだった。

でも今、同じようなことをしていてもそんなえっちな気分にはなっていない。

そう…そうなんだ。俺は赤ん坊だからだ。本能的に母乳を求めているだけなのだ。

そう考えると不思議なもんだ。俺が死ぬ前に彼女と愛し合ったのは…

——ん？…この母親はたしか美香って呼ばれてたよな…

Σ（・・・エエツ！？まさか…いやそんなことは…

こんな名前の人はいくらでもいるもんだ。

なんかもう疲れた。ってか、また疲れたw 考えてたつてしょうがないさ。寝よう。またあとでいいのさ。時間はたつぷりある。

俺は深い眠りに入っていた。

第3話 来客の日々

数日たって、ふと気が付いた。

そういえば、俺が生まれたっていうのに父親が来ていない。

何かわけありなんだろうか？じいさん婆さんが来訪したときも、父親についての話題はいつさいしていなかった。

まさか…シングルマザー？

この産婦人科を退院したら母子家庭になるのだろうか？

いろいろ考え始めるとキリがない。まだしばらくは俺の目も見えないだろうし、なんかイライラする。

でもどうしてなんだろう？赤ん坊はまだ脳も発達していないはずなのに、なぜ俺はこれでだけ考えたり悩んだりできるのだろうか？しかも、生まれる前の記憶も徐々に蘇ってきている。いわゆる前世っていうやつなのか？

それにミルクにも飽きてきた。ラーメンも食いたいし寿司も食いたい。

でもさすがにそれは当分無理だろう。

俺はこれからどんなふうに生きていけばいいんだろう？

しかも女の子だし…
| ^ A

考えても時間はたつぷりありそうだからのんびりいくとしよう。
こうなったからにはどうにもなるもんでもない。と考えたのはもう何度目だろうw

しばらくして別な来客が来た。

「美香ー！おめでとおお！」

「美香、おめでとう。キヤー可愛い赤ちゃん！」

「美香ー！やったねー！〇（　）〇 イエイエイエイ♪♪」

どうやら女友達が3人来たらしい。俺はたちまち、代わる代わる抱かれまくり、絶賛のほめ言葉を浴びた。まあ、普通に考えても人の赤ちゃんに対して『わ、キモい赤ちゃん！ブサイクねえ』なん

ていう人間がいるはずもないが。

「美香、これ。はい、少ないけど」

「あたしもね、はい」

「あらためておめでとう。これから大変だから有意義に使ってね」

「ああ、みんなそんなに気を使ってくれて……わざわざ来てもらった上に。ホントにありがとう」

（・ε・ん？もしかしてこれってきつと出産祝いのご祝儀だな。

（*、*）ウヒヨヒヨ。。一体みんないくら包んでるんだろ
う？

なんか俺がこの金を使えるわけでもないが、現金もらうと妙に嬉しいもんだww

その後も数人、親戚や友人関係が順に押し寄せ、出産祝いも次から次へけっこうたまったようだった。そしてようやく人が途絶えたころ、美香という俺の母親なる人が、のし袋を開け始める音が聞こえた。

「うわー、恵美は2万も！あ、さゆりは5千円かあ。今月苦しいの
かなあ？あああ、市議会議員のおじさん5万円も入ってるう
♪（@^ ^@）わぁーい」

なんとなく親の醜い1場面を見てしまったような……；

第4話 衝撃の事実

こんな寝たきり状態の中で、俺が1番不快感なのがトイレに行けないこと。それこそ、小のときも大のときも気づかれるまで放置状

態。

泣いてみせてメッセージを伝えようとはしているものの、このバカ母は経験不足というか、鈍感というか、すぐには気づいてくれない。逆に看護師さんたちの方が理解してくれるのだ。

しかしながら最近では、おしりを拭いてくれるときなんかは最初はかなり気恥ずかしかったが、自分が赤ん坊であることに慣れ初めて来ると、けっこう快感になってきた。すっきりした爽快感の他に、何より自分でやらなくても全部人がやってくれる。言わば殿様状態。クセになりそうだw

それから数日後の1週間目、ついに俺と母親は退院の日を迎えた。行き先は親のいる実家らしい。あのニンク臭かったじじいの運転で玄関先に到着すると、早速、婆さんが待ち構えていた。

一応これから世話になる礼儀上、俺は笑ってみせた。
「よく来たねー。お婆ちゃんだよー。あー笑った笑ったー」

これくらいのことですべてみんな喜んでくれるなら、た易いことだ。

俺と母親はそこで過ごすであろうと思われる部屋に通された。爽やかな風と共に潮の香りも流れてくる。どうやら海のそばらしい。
い。

うむ。なかなかいい環境だ。毎日ぐっすり眠れそうだな。

その後、俺は毎日風呂に入れられた。俺の風呂係は毎日何かしら口の臭いじじいだった。ある日は酒臭くて、ある日は納豆臭くて、またある日はネギ臭かった。

しかしそれさえ我慢すれば、元々死ぬ前から温泉が大好きだった俺は、風呂が嬉しくて気持ち良さのあまり、湯船で寝入ってしまった

ていた。

「この子はえらいな。大物になるぞ。風呂に入れたら大泣きするのは覚悟していたのに、こんなにウツトリした顔で寝てしまうなんてな」

じじいは近所の人たちにも毎回この風呂話を自慢げに話した。近所の人たちもいい迷惑だったろう。

それにしてもどうやら俺にはやっぱり父親がいらないらしい。これから母子家庭で育つのだろうか？あるいは、いずれ母親に男ができるとき、俺はどうなるんだろう？施設行きか？それとも同居しながら父親に虐待を受けるのだろうか？ちと早い先走りかもしれないが、その日に備えて俺の体ができあがってきたら鍛えておかなくては。

毎日がほとんど寝てるだけで、頭が絶壁になってしまわないか心配になってくる。それに、まだハイハイもできないでいる自分に歯がゆくなってきた。目はようやくうつすら見えるようになったが、はつきりと人の顔はわからない。でももう少しの辛抱だ。

そして俺の名前が決まったようだ。まわりが一斉に呼び始めた。「ことみちゃん。ほら。イナイナイバー！」と、婆さんが言う。今どきイナイナイバーなんてまだ言うもんなのか？（＝・m・）
ウププ

でもなんか、ことみちゃんなんて呼ばれると俺はオカマバーで働いてるような感じがして、おかしくてたまらなかった。

「あ、笑った笑った！。名前気に入ってくれたのねー」

気に入るもなにも。；^ ^ A 笑えるんだよ！

でもやっぱし…これから女の子らしくしなきゃなんないのかなあ。
。。。

そんな中、ついに俺はある程度は目が見えるようになった。
そして、ついにこの瞬間！鏡に映った自分を見る瞬間がやってきた。

おおー！俺って可愛いっ！！

かなり嬉しかった。やっぱり美人でなきゃなw

「ことみちゃん。ミルクの時間でちゅよ」と母親の声。

「はい、ママがだっこしてあげるねー！ん？え？どうしたの？
ことみ。なんでこっち見たまま固まってるの？ママの顔なんか変？」

——そりや。。。固まるさ——

お前……美香じゃん。俺の…俺の恋人の美香じゃねえか。

第5話 恋人が親

俺は自分でもわかるくらい固まっていたが、与えられたミルクだけは本能的というか赤ん坊の定めというか、無意識に口が動いてすすっていた。

一体どうなってんだ？俺が美香から生まれたってことか？信じられるかそんなこと！

じゃあ、どう理解すればいい？死んだ俺がなぜこんな形で存在してる？

美香は俺がいなくなっからすぐ再婚したのか？
ということは俺と二股かけてたのか？

いや。。でも父親はいないようだし結婚はしてないようだ。

俺が死んでやけになって、行きずりで妊娠してしまったのか？

いや…美香はそんな女じゃない。

うーん、わからんわからん。わかんねえよ！

今すぐにも美香に真相を聞きたい。1度しゃべってみようか？どこまで口がまわるだろう？まだろれつがまわらないもんなのだろうか？

でも、もし俺が今しゃべれたとしたら化け物扱いされるかもしれない。

うん。。もう少し冷静になって考えよう。今のままではどうしようもないのだから。

翌日の朝、目覚めた俺はマジマジと美香を見てみた。

俺と付き合っていたころの美香と見た目も変わらない。年もとっていないように見える。

俺と死別してからそんなに立ち直りが早かったのか？ちょっとシヨック…

ミルクを飲むたびに美香の胸に抱かれるので、いつも顔を下の角度ばかりから見ている。美香は少し太ったかな？顔を俺に向けると2重アゴになっている。俺は相変わらずにミルクか母乳を飲まされている。

ふと衝動的に母乳を飲まないで、美香のオッパイの先を舐めてみた。

きゃwくすぐりたい！ことみちゃん、吸うのよ吸うの。舐めてるだけじゃ飲めないわよ」

わかってるって。わざとやってんだろっが。

しかしこの先本当にどうなってしまうのか。

もし俺がこのまま女として成長していったとしても、男なんて好きになれねえぞ！告られたらぶっ飛ばしてやる！

まあ、今こんなことを考えてもしようがないんだが。

美香の実家は海のそばだけあって、夕食には肉よりも新鮮な魚や海鮮料理が食卓に並んでいた。もちろん俺はそれをまだ口にできず、ひもじい思いをしていた。

「お、ことみがよだれ垂らしてるぞ。刺身でも食いたいんじゃないのか？」と、じいさんが言う。

「まさかそんなわけないでしょ！おじいちゃんたらw」

いや、そんなわけなんですよホントに・^| ^A

全く夕食の時間は拷問だぜ。(。ー)ホロリ

月日が流れて、出産後の日が明け、美香も炊事や洗たく、買い物もこなすようになった。特にスーパーに行く俺はベビーカーに乗せられ、見ず知らずの買い物客に触られまくるのであった。それもほつぺたばかりツンツンされるので、こそばゆくしょうがない。たまに4歳児が5歳児の子供が物珍しそうに俺を見てはちよっかいを出してくる。

このクソガキが！走れるようになったら仕返ししてやるからな！

俺はスーパーではいつも機嫌が悪かった。

そんなある日、美香は俺を連れてどこかへ出かけようとしていた。
「じゃお母さん、言ってくるね」

「気をつけるんだよ。向こうさんもきつと喜んでくれるよ。よろしく言っておいてね」

「うん。」

いまいち俺にはすぐにピンと来なかったが、美香が運転する道をじつと見ているうちに、たしかに見慣れた風景であることに気が付いた。

そして到着した場所――

そこは……俺の家。つまり俺が死ぬ前、大人の男として生きていた世界の家だった。

美香は俺を連れて堂々と玄関に入って行った。

第6話 昔の実家にて

「ごめんください。美香です。今着きました」

そう言つと、美香は抱いている俺の顔を見て、考え深げに微笑んだ。

奥の方から年配の女性が玄関に現れた。それはまぎれもなく俺の前世の母親だった。

「まあ、美香ちゃん。よく来てくれたわねえ。さっきお母さんから電話もらってびっくりしちゃった。」

「ごぶさたしてます。ようやくこの子を産んで日が開けたもんですから」

「まあ、玄関で話すのもなんだから、遠慮なく入って入って」
「はい、お言葉に甘えて。お邪魔します」

俺と美香は応接間に通された。この部屋も懐かしい。子供のころ夏場の暑い時期は、この風通しの良い部屋でよく大の字になって昼寝したもんだ。

「今お茶入れるから待っててね。」
「あ、おかまいなく」

俺の母さん。もうしばらく会ってないような気がする。一体俺が死んでからどのくらい月日経っているんだろうか？

俺の前世での記憶の最後は、病院で母親に手を握りしめられているときだった。俺が事故って薄れゆく意識の中で、母さんは泣きじやくりながら俺を呼び戻していた。そう…あんな必死な母さんを見たことがなかった。俺も死にたくはなかったが、もう自分で無理だと悟っていた。あのときは無念でたまらなかった。

母さん。もう1度会いたかった。ずいぶん心配も迷惑もかけまくりだった。そして先に死ぬなんて親不孝もいいとこだ。

「お母さん、ことみを抱いてやって下さい」

美香は俺の母さんにそう言うと、そつと手渡した。

「ことみちゃんって言うのかい。可愛いねえ…ぽっちゃりして」

俺は嬉しくてたまらなかった。今まさに母さんの胸に抱かれている。これが大人の体だったらとんでもなく恥ずかしいことだが、今の姿の俺にとって、母親に抱かれることは感激でしかなかった。謝

りたい思いでいっぱいだった。ごめん母さん。。本当にごめん。
一人っ子の俺がいなくなつて、さぞかし寂しい思いをしてるんだ
ろう。俺は今にも自分の正体を名乗り出たい心境だった。

そして母親に抱かれながら俺はもう熱い思いがこみ上げてきて、
泣きまくってしまった。

「あらあら。やっぱりママじゃないとダメなのね。。じゃママの
とこに戻りましょうか？ことみちゃん」

違うよ母さん。違うんだってば！そんな理由で泣いてないんだ。
嬉しいんだよ。嬉しくて悲くて自分が情けないんだよ。まだ抱いて
いてくれよ。頼むよ母さん。まだ母さんのそばにいたいよおお！

俺は泣き止むことができなかった。ホント馬鹿だよ俺は。笑つて
ればまだ母親の胸にいられたのに。。。

俺は美香の腕に手渡された。

「出産のときはいけなくてごめんなさいね、美香ちゃん」

「いいえ、事情はわかってますから。お母さんお一人で仕事もかか
えながら大変ですもの。」

そう、俺の母親も女手ひとつで俺を育てた。いわゆる母子家庭だ
った。

「それより美香ちゃんも私と同じ道に行くのは辛いわよ。いい人が
できたら遠慮なく再婚して幸せになりなさいよ。もう浩一のことはい
いいから」

「ええ…はい。。。」

「本当なら、その子の養育費くらい払ってあげたいんだけど、私ひ

とりじゃ自分の暮らしだけで精一杯なの…」

「はい、わかってます。お母さん、気になさらないで下さい。あたし、そんなこと全然望んでませんから」

え？養育費？何で母さんがそんなこと考えるんだ？どーゆーこと？？ええ？？ま、まさか。

「お母さん、浩一さんの仏壇拝ませて下さい」

「ええ。こつちへいらっしやい」

俺と美香は仏壇の前にいた。不思議な気持ちだ。今仏壇にある自分の写真を見ている。母さんは毎日この仏壇に俺のためにお供えしてくれてるんだ。

とそのとき、美香がしゃべった言葉に俺は呆然となった。さっき俺がまさかと一瞬思ったことが、事実として証明されたのだ。

「ほら、ことみちゃん。この写真がパパでちゅよー」

ガ ΣΣ(。D；) ン！！

そ…そんなのってありか？Σ(・・ *エエツ！？頭がこんがらがってきた。

俺が美香を妊娠させてたってことか？？

そして…そして生まれた子供がまた俺だと？！

赤ん坊の俺の父親が俺だつてえ？？

なんでそうなるんだあああああ？

「あら、この子写真見てびっくりしてるような顔してる。父親だつてわかるのかしら？」

そ、そうじゃないって！パニックってんだよ！
今は真っ白で何も考えられないんだよ！

第7話 はがゆい毎日

訪問先から戻った俺は、自宅のベビーベッドに寝かされていた。いろいろ考えることがあっても、ショックなことがあっても、赤ん坊の俺はすぐ寝てしまふのだった。

早く成長したい。せめて一気に5歳くらいになりたい。
そうしたら何でも好き放題話せるだろう。

ちよつと大人に鋭いツツコミを入れたとしても、おませな子くらいにしか思わないに違いない。むしろ頭がいい子として、ほめられまくるかもしれない。

おお、そうだ！俺がみんなの前で漢字書いたり、計算したりしたら天才少女としてTVで儲けて、ひと財産作れるかもしれない！

うん。そうだ、そうしよう。そして歌も歌おう。

あ、待てよ…童謡の歌詞とか、もう忘れちまったな。

まさか幼児がみんなの前でロックンロールやヒップホップ歌うわけにはいかんだろう…ちくしょう！得意なんだけどなぐ…
| ^ ^ A

なんか早く実現したいことがたくさん出てきた。

毎日がすごく長いぜ。こんなに自分の将来を先に考えてる赤ん坊

なんているわけないよなw

勝手に想像が膨らんでゆく俺は、ひとりで可笑しくなった。

もう、自分の出生のことなんてどうでもいいや。俺は俺！

美香は多分、俺の母さんにもたまに会いに行くだろうし、俺が成長したら勝手に行けばいい。

でも待てよ——この世の中には俺と同じ立場の赤ん坊がもつとい
るのだろうか？

前世の記憶を持ったままの人間が——

「おじいちゃん。ことみのおむつ替えてー。悪いけどあたし今、
手が離せないのー」

と、恐ろしいセリフが耳に入った。

口臭じいだけでは勘弁してもらいたいのに！ちゃんとポリデント
使えってんだ！ああ、やばい。俺にキスしようとしてる！ひえー！

（ 〇 ）

「ことみー。おとなしいねえ。いい子いい子。ほら、じいちゃんの
接吻攻撃だぞお！ブチュッ！ブチュッ！ブチュッ！ペロペロベロ」
せつぶん

ペロペロはやめてくれええええええ（T T）うおおおおお！！！！

「あー泣いちゃったかあ…きっとオムツが汚れて気持ち悪いんだな。
じいちゃんを取り替えてやるから待ってな」

またまた拷問だぜこれは。。

俺はそのとき、あまりの不快感につい口走ってしまった。

「ハゲこら！やめんか！」——あ、しゃべれたw

「なに？え？ハゲ？」

じいさんはきよんとしていた。

やべやべ…つい言っちゃった。やっぱまだこの年でしゃべるのは早いな…

「わしの気のせいか。。うむ」

じいさんは空耳だと思ったようだ。

さてよ、これもけっこう面白いなw 退屈しのぎにたまにはこうやって遊んでみるかw

それにしても早くうまいもん食いてえなあゝ

第8話 有意義な毎日

歳月が流れ2年後——

俺は今や2歳になって、やっと自由に走り回れるようになった喜びではしゃぎまわっていた。

「もう、ことみはおてんばなんだからー」

と、美香に口癖のように言われている。

でもまだ足元が少し不安定なので、よくけつまずいて倒れるが、

前世時代俺は、柔道をしていたので、受身が自然とこの体にも受け継がれていた。倒れた瞬間にクルッと受身をして立ち上がることができるのだ。

最初これが無意識にしたときは、美香をはじめ、ばあさんもじいさんも驚いていた。

「ええ、ことみちゃんいつからそんなことができるようになったのー？」

「ことみ、すごいじゃないか！誰からも教えてもらわないのに受身ができるなんて」

「やっぱりこの子は浩一の子ね。でもやだわ。女の子らしくなってもらいたいのに、ことみったらしゃべる言葉が乱暴で…そんな言葉なんて教えたつもりはないのに。」

そう、俺はつい自分が2歳の女の子だということを忘れて男言葉をしゃべってしまふ。というか、女の子らしいセリフを言うなんてこっ恥ずかしい上に、芝居じみてとても言えなかった。

だが、まわりに心配かけるのもなんだから、そろそろ女言葉でも話す努力をしようとは思っているんだが…

「ママ、おやつ」

最近俺はよくおやつをねだる。食う意外、ひまでひまでどうしようもないのだ。

「もう今日はおやつないわよ」

「エエエエエ（、ム）エエエエエ」

「ことみ。ほら、おじいちゃんのとこに抱っこしに来たらおやつ買っただげるからおいで」

「やだ！おじいちゃん口臭いんだもん。」

2年たつても相変わらずじいさんの口臭は変わらなかった。

「（*^m^*）ムフツ。ことみちゃんは、はつきりもの言う子ねえ」

俺はどんなに暴言を吐いても何をしても怒られなかった。すべて子供だからという理由で許してもらえるのだ。

今の年齢くらいが1番楽ができていいのかもな。

「ことみも4月から保育園なのに、みんなと仲良くできるのかしら？」

んなにいいい？この俺が保育園だつてええええ？

「まだ2歳だから上の子とかに虐められないか心配だわ」

「でもそれは先生がちゃんと見ててくれるから大丈夫よ」

「だって…やんちゃん子つて目につくでしょ？」

「まあ、行つてみないけりやわからんだろが。学校じゃないんだから嫌ならやめりやいいんだ」

「おじいちゃん、そんな簡単に言わないでよ。あたしだつて生きていくために仕事しなきゃなんないんだから」

そつかあ…そうだよな。美香だつていつまでも、ぷゝのままではいられんわな…

「ことみ、保育園に行ったら毎日おやつのあるからね」

「(@ ^ ^ @) わぁーい。」と俺はおどけてみた。

おやつもいいが、俺が保育園に行くようになったら絶対天下取つてやるさ。(_ _) ふふ。クソガキどもにナメられてたまるかってんだ！

●夕食の時間●

「ママのお刺身食べたい。」

「Σ(´・`エエツ!?!ことみにはまだ生ものはちよつとねえ…」

「食べたいったら食べたいっ!お刺身食べたあああい!」

「もう…じゃあ一切れだけよ?あ、これわさび醤油だから別なお皿にお醤油だけ入れるわね。」

「工工工工工(´A`)エエエエ工 刺身はやっぱりわさび醤油に決まってるじゃん!」

一同、同時に目がテン。

「(・|・)…………え?」

部屋が静まりかえってしまった: ^ | ^ A アセアセ・・・やべw

「あは、あははは・・・こ、子供って予想もしないこと言つもんよね。」

「え、ええ。そうだけど…なんでことみてこんなにオヤジくさいこと言うのかしら?」

ガ ΣΣ(´A`;) ン!!

前世のときもオヤジくさいなんて言われたことないのに。。

やっぱりそろそろ言葉には気をつけた方がいいな。と反省してみるw

あゝあ、早く酒も飲みてえゝ!20歳までは長すぎるぜ。

ま、中学になったら隠れて飲めるかもしれないけどな。辛抱辛抱…

「ことみに女の子らしくなってもらうために、今度もつと可愛いフリフリのスカート買って着せてあげるわね」

げっ!今着せられてるミニスカートだって充分口リじゃねえか!

ちよつと足上げたりお辞儀するとすぐパンツ見えるしよ。女はよくこんなもん恥ずかしげもなく履けるもんだぜ。

そして4月になり、俺はいよいよ入園し、外の世界へのデビューが訪れたのである。

第9話 保育園での出来事

入園式当日、俺は真新しい園児服を着せられて全身が映る鏡の前に立っていた。ちよつとだけ、はにかんでみる俺。

うん、我ながら可愛いかも。（＊、＊）ウヒョヒョ

これからクソガキ相手に退屈かもしれないが、家にいるよりは気分転換にはなるだろう。

「ことみ、可愛いよ。今写真撮ってあげるからね。」

美香は昨日、スーパーの特売で買ってきた498円の使い捨てカメラを手にして、俺を玄関先の海が見える方向を背景にして数枚シャッターをきった。

「ことみ、ほらちゃんと胸張って！こつち見て！目線ズレてるわよ。あくびなんてしないの！ニコツと笑って。表情堅いよことみ。ダメダメ、もっとスマイルスマイル！」

うつせえなあ……。たく。園児がこの年で愛想笑いできたら気持ち悪いだろがよ。美香のやつ、俺と付き合ってたときはこんなに口やかましい女じゃなかったのに。

「じゃあ時間なんで、ことみと行ってきます。お母さん」

「気をつけてね。ことみちゃん頑張って来るんだよ」

頑張るもなにも。。どうしようもねえじゃん；^|^A

「おばあちゃん、ことみちゃんが帰って来るまで、ご馳走作ってるからね。何かリクエストある？」

「じゃあ、乾杯するのにシャンパンかワインでも」

「……は？……」

「ことみったらもう、また変なこと言っ！さあ行くわよ。早く来なさい」

俺は手を引つ張られるようにして美香に連れられて行った。

入園式には、めかし込んだ若い母親がたくさんいた。美香もいつもよりケバいい化粧をしていたが、さすがの俺も本人にそんなこと言えるはずもなかった。

「あら？もしかして美香じゃない？」

と、ひとりの園児の母親が声をかけて来た。

「あ…友里？」

「うん。そうだよ。おひさしぶりーw」

「ほんとだねー。その男の子友里の子？大きいわね。ここに入るの？」

「うん。そうなの。この子も4歳になったし、あたしもそろそろ仕事復帰しなきゃと思って」

「あたしもなのよ。うちの子なんてまだ2歳だけど生活のためには仕事しないとねー」

「ねえ、お名前なんていうの？教えて」

美香の知り合いと思われるその女性が俺に聞いてきた。

「ことみ…（*^ - ^*）ゞ」

俺は少し恥ずかしげに言ってみた。その方がきつと可愛く見られると思ったからだ。

「あらw照れちゃって可愛いわね」

ほら図星w 俺もなかなか演技がうまいもんだ。

「うちの子は龍之介っていうの。よろしくね」

俺より2歳年上の坊主のようだが、どう見ても馬鹿息子にしか見えなかった。母親同士が話してる間、このガキはずっとハナクソをほじっていた。

「ほら。龍ちゃん。ことみちゃんに挨拶しなさい。」

「べえ〜だ!（「」）」

と言ってこのガキは、ほじっていたハナクソを俺になすりつけた。俺がキレたのは言うまでもない。

「てめえ何しやがんでえ〜ごらああ〜!!」

俺はクソガキのボディにパンチを入れ、相手が前かがみになったところをひざ蹴りでアゴにヒットさせた。

クソガキは1発で後ろに倒れ、そのあと大号泣した。

「こ…こ、こ、ここことみ。な、なんてことを…」

美香には想像を絶することが起きたようで、すぐには頭の中で整理することができないようだった。また、相手の母親も同じだった。

「美香…じ、自分の子に一発必中のケンカ技でも教えてるの?」

「…そ、そんな。全然そんなことなんて教えてないわよ」

「でも慣れてないとできないわよ。今のなんて。」

「そうだけと、とにかくごめんなさい。本当にごめんなさい。龍ちゃん。友里」

「いえ、悪いのは先にいたずらした龍之介だから、謝るのはこっちなんだけど…ことみちゃんにビックリしちゃって…」

「あ、あたしものの。ほんとにもうびつくり…さあことみ、あなたやりすぎよ!龍ちゃんにごめんなさいって言いなさい!」

ここは素直に謝った方が良さそうだ。これで俺も人から一目置かれるに違いない。

「龍ちゃん、ごめんなさい」

「ほらことみちゃんが謝ってくれたでしょ。龍ちゃんも謝りなさい」
クソガキはまだ泣いていたが、鼻水をすすりながら母親の言うことを聞いた。

「うう。。ごめんなさい。。ひつく…うう…ひつく。」

その後は何事もなく過ぎたが、帰宅してから美香のショックは消えず、俺を見ながら放心状態のように座りこんでいた。

悪いことしちゃったな。。こんな美香見るのは初めてだ。改めてちゃんと謝るかな？でも素直すぎると子供らしくないな。2歳にしてはモノワカリが良すぎるのもなんか変だし。

「…浩一」と、美香が口走った。

え…？美香どうしたんだ？…お前は今何を考えてるんだ？今の俺には心の中でしか聞くことはできないが、一体お前の心の中はどうなってるんだ？

美香が俺を見つめながらつぶやいた。

「ことみはまるで浩一のように…あのケンカの仕方…そしてあの言葉。」

——美香お前

美香は俺を突然抱きしめた。

「浩一。。どうして？どうしてこの子の顔も見ないで先に逝っちゃったの？浩一。。浩一！なんであたしを置き去りにしたのよおお」

美香は誰に遠慮もせず泣いた。大声で泣いた。そばで様子を見ていたじいさんもばあさんも美香を止めることはなかった。

俺はたくさんの人を不幸にしたんだな。

俺はこれからどうやって生きていけばいいんだろう。

昔の記憶なんてなくなってしまえばいいのに。

それとも俺は生まれ変わるのではなくて、あの世で過ごした方が良かったのではないのか。

俺の本当の居場所ってどこなんだ？

もう…誰にも迷惑はかけたくない。

第10話 楽しい保育園生活

今の俺が年相応のいい子でいるには、かなり自分を抑えなくてはならない。頭脳は20代なのに行動は園児に合わせるんだから。

こんなときって、きっと赤ちゃんプレイが大好きな変態野郎だったら得意満面なんだろうな。少し遊び程度で経験しときゃ良かったぜ。

保育園で数日がたち、他の子供たちは結構慣れ始めてきて、仲良しグループも自然に派閥ができていた。

俺は初日でケンカした反省から、おとなしく猫をかぶっていたので、おしとやかな女の子グループに属していた。他にも活発でオテンバな女の子グループもいるのだが、俺がそこに入ってしまうと天下を取ってしまうのが目に見えてわかるので、変にこの状況を乱さないように心がけた。

「はい。みんなあゝ。今日はお絵描きするよゝ」

このリス組担当の、ちひろ先生が俺たちに声をかけた。

この先生は倉木麻衣似で、けっこう可愛かった。俺が大人だった
らきつとナンパしていただろう。

「今日はみんなのパパの顔書いてねー」

ん？父親だつて？俺は自分の前世の顔書けばいいのか？
いや、そうじゃないだろう。

「せんせー！」

「なあに？ことみちゃん」

「うち、パパがいないの」

「え？（。○。；）」

園児の家庭の事情くらいよく下調べしとけよ。まったく…

「うち母子家庭なの」

ガ ΣΣ（。㊦。；） ン！ーアタゝ（； ；ヾ＝ヾ； ；）

ノフタ

と、ちひろ先生は自分のうかつな発言に気づいたようだった。

「ご、ごめんね。ことみちゃん。えと…あのね、じゃあお母さんで
もいいわよ。あ、それともおじいちゃんでもいいし」

「じゃあ二人とも描くー」

「そ、そうね。そうしてちょうだい。それにしてもことみちゃん、
よくそんな母子家庭だなんて難しい言葉知ってるわね。ハハハ
「あ・・うん。マ、ママがよくゆってるからー」

俺もちよつとあせつた。子供らしい単語じゃなかったな（ー；
ヒヤリ

その後、俺はクレヨンであつという間に描いてやった。
絵は得意というわけではないが、やはり前世で要領を心得てるせ
いだろう。でもこれがやっぱりヤバかった。

「うわー、ことみちゃんすごく上手うー！びっくりー！」

ちひろ先生はあまりに大声で絶賛したので、となりのうさぎ組の
ベテラン、ヨネ子先生が飛んで来た」

「ちひろ先生、なにがあつたの？どうしたの？大丈夫？」

「あ、すいません。大声出しちゃったりして。別に事故とかじゃな
いんです」

「当たり前よ。事故なら大変よ」

「本当にすみません。実は、ことみちゃんの絵がすごく上手で、と
ても2歳児の絵とは思えないほど素晴らしいんです」

「ええ？見せて見せて。どれどれ」

やっぱマジやばかった。まだいろいろ気をつけることだらけで疲
れるぜ。

「すごおおおお！ほんとにこの子が描いたの？まだこんなち
つちやな子が？ひよつとしたら天才かもしれないわよ！きつと生ま
れ持った才能ね」

「でしょう？ヨネ子先生」

「だって顔の輪郭も太く描いてるし、肌の色に影があつて立体的に
なってるなんて。とても2歳の描く絵じゃないわよ」

「これは永久保存版だわ。額に入れて廊下に飾りましょう」

おいおい、随分大げさじゃねえかあ？こりや困った…（ - ；

その後、このお絵かき時間の大騒ぎ事件もなんとか一段落して、俺はいつものおしとやかグループの中で遊んでいた。いつも人形遊びとつみきばかりで退屈していたが、この日は仲間のミホちゃんが別な遊びをしようと持ちかけた。

「ねえ、みんなでおままごとしようよ」

「うん。いいよお」

「しよしよ」

「（@^ ^@）わぁーい」

「じゃミホはお母さん役ね。さくらちゃんはお赤ちゃん役。もえちゃんはおばあちゃん役。ゆりかちゃんは隣のおばちゃん役。そしてことみちゃんはお父さん役でいい？」

「うん。いいよお」

偶然にも俺に男役とはw マジでリアルになっちゃうぞ？w

それにしてもミホちゃんて子は、一見おとなしそうに見えるが、何かしようというときはいつもテキパキと人に支持するし、決断力が早い子だ。

「じゃ始めるねー」

ここからは子供のアドリブの世界なのだw

「ただいまー！帰ってきたよー」

「お帰りなさい。ごはん出来てるわよー」

「今晚のおかずはなんだい？お母さん」

「今日はチーズハンバーグよ」

「おおー！それはおいしそうだ。でも先に晩酌してからだな」

「????え?ばんしゃくつて?」

あ、ヤバ。まだこの言葉は早すぎたかな(^ | ^ ;) そばで聞
いてるちひろ先生もズッコケてるしw

「んん」と…あのね、ごはんの前にお酒飲むことだよ」

「ふうん。でも体に悪いからウチではお酒とタバコは禁止にしま
す!」

「ええええええええ」

きつとミホちゃんの家庭の事情ではそうなのだろうw

「さあ、早く食べないと冷めちゃうわよ。もえおばあちゃんと隣の
ゆりかおばちゃんもどうぞ」

「(・A・)ノはい」

「いただきまーす」

なんで、隣のおばちゃんがウチでごはんを食べるのは、よくわ
からないが、子供の世界ではこれで納得済みのようだ。

「あゝおいしかったあ。お母さんのハンバーグは最高だよ!」
と言ってみる。

「ありがとお。明日はお父さんがごはん作る番ね」

当番制かよっ!!(・A・) ; ; ;

「ふう…お母さんもお腹いっぱいになっちゃったから、赤ちゃん産
まれそうよ」

(ノ | |)ノコケッ!!(ノ | w |)ノバタ…にやにいい
く?w

「またもや、ちひろ先生もコケてるしw
子供の解釈は想像を絶するもんだ。」

「やったあ！赤ちゃん産んじやったあ！さあ、さくらちゃん。みんなにご挨拶なさい」

「はい。みなさんこんばんわ。さくらちゃんです」

・・・（ ）産まれてすぐ挨拶かよw
しかも当然のごとく名前まで決まってるしw

俺は、この非現実的なままことで、腹をかかえるほどの笑いをこらえるのに必死だった。みんな真面目に演技しているのに、芝居を壊すわけにはいかなかった。それなのにちひろ先生は、柱に頭を打ち付けて、ひとりで抱腹絶倒していた。

保育園も悪くないな。うん、悪くない。

どの子もみんな個性を持って面白みがあるし。

先生たちもヨネ子先生以外はきれいだし。

卒園までいろいろ楽しませてもらおう。

（続く）

第11話〜20話

第10話までのあらすじ

事故死だった浩一がふと目覚めたところは、そこはなんと産婦人科で、自分が今、母体から女として産まれてきたところだった。

前世の記憶を持ったまま過ごす毎日の歯がゆさや、楽しみの中で、浩一（現世ではことみ）は、成長し続けてきた。

そして保育園に入園して、いよいよ外界との接触。

果たして彼（彼女）の生き方は今後どうなっていくのだろうか。

第11話 成長著しいことみ

月日が経ち、俺は年長組になっていた。

赤ん坊の頃は言いたい言葉も言えず、かなりのストレスと共に生きてきた俺だが、もうすぐやっと小学1年生になろうとしているこの年頃になると、多少は年齢にそぐわないことを言っても『大人びた子供』『頭の良い子供』『将来、大出世する子供』という具合に大人たちから高く評価されるようになった。

ついこの間、保育園の行事のおゆうぎ会でも、俺は牛若丸役で、自分で言うのもなんだが、来客の父兄たちに見事な立ち回りを見せ、喝采を浴びた。同年代の年長組にもランクの違いを見せ付けてしまったのには反省したが、わざとヘタな芝居をするのも苦手だし。。

まあ万が一、天才少女として世間で注目でも浴びたら、TVや雑誌の取材が来るだろうから、俺んちにも出演料やら報酬が入ると美香も助かるだろうし、良しでしょう。

それにしても、俺が女の子なのに、あえて牛若丸役に抜擢したちひ

る先生もたいしたもんだw

それよりも俺がいまいち不満なのが、毎日のおやつだった。

美香（母親）は俺にチョコレートとガムを禁止している。

それでさえもこの俺の立場上、酒やたばこは我慢してるのに。

前世の俺と付きあつた美香の面影がなくなってきたようだ。

まあ、母子家庭だし、子供のしつけには特に厳しいのかもしれない。

そんな中で、ごくたまに俺はじいさんと一緒に買い物に行くことがある。そのときは俺の好きなお菓子が自由に買えるのでチャンスだった。

俺は辛いのもが好きなので、ハバネロスナックを選んでも、じいさんはすぐ買ってくれる。俺は美香に見られないように、別部屋でそつと食べるのだ。

でもさつき、ついに美香に見つかった。

「ことみ！こ、こんな辛いものを食べてたなんて！ダメよ！まだ子供がこんなもの早過ぎるわ！」

「おいしいよ？ママにもあげるから。好きだったでしょ？」

「好きだった？」

「あ、いや・ママも辛いもの好きそうだから…ママにも食べさせてあげようと思って…」

「もおー！うまいこと言って！おじいちゃん、おじいちゃんてばっ！ことみにこんなの買わせたらダメよ！」

隣の部屋にいたじいさんがやってきた。

「ええ？普通のお菓子じゃないのか？チョコレートじゃないからいいかと思っただが？」

「じゃ食べてみてよ。ほら」

じいさんはハバネ口を無造作に手にとって口に運んだ。

「ぐあああああ！！（Ｔ□Ｔ）げぼっ！げぼっ！げぼっ！ななんじゃこの食いもんはああゝ！み、みみみ水、水水ゝ！」

じいさんは一目散にキッチンへ走って行った。俺はおかしくてたまらず、笑い転げていた。

「もう、ことみったら。その笑い方全然女の子らしくないわ」

「だって・・・おじいちゃんが・・・＊、m、）ノシ ププププ！！バンバン！！」

「ことみにはもっと早くからピアノでも習わせてあげたかったけど、うちの家計じゃ無理だったのよねえ・・・はあゝ」

美香も最近ため息が特に多くなったようだ。

「ママ、ことみ１年生になったら女の子らしくするから！」

「ほんとにいい？ママと約束できるう？」

「うん、絶対の絶対に約束するー！」

と、言っておけば美香も少しは気が楽になるだろう。

「じゃあ、ママがことみに可愛いお洋服たくさん選んであげるね！」

「ママお金だいじょうぶ？」

「へ（ω一一）へぎくッ！・・・あんたが心配しないでいいのよっ！ほんとにこの子って子供らしくない鋭いこと言っただから。」

いろいろあった保育園時代だったが、なんとか無難に切り抜けた俺は、４月に入り、ついに新１年生として小学校に通う日々を迎えたのだった。

第12話

新入学と家庭訪問

新1年生になった俺は、数日前に母親の美香と一緒に、入学祝いをもらった親戚や近所の家々に、お祝い返しをして廻った

1件1件、顔見世挨拶するのは正直めんどくさい儀式だ。儀礼的な言葉のやりとりがわざとらしくて、大人の世界がアホらしく思える。

「あの・・・うちのことがこの度、無事に新入学致しましたのでお礼と言つてはなんですが・・・これを・・・」

「んまあゝ！そんな気を使わなくていいんでございますわよお。ことみちゃんも知らないうちこんなになんて大きくなって」

このように、どこの家を廻っても同じセリフのオンパレードだった。

この言葉を鵜呑みにして、ほんとに気を使わなかったらとんでもないことになるのは衆知の事実だろう。

「あの家、お礼のひとつもなかったわよ。全く最近の若い人は、世の中の常識も知らない人ばかりで・・・これから思いやられるわ」と言つた具合に聞こえてくるようだ。

思いやられるのはこっちじゃボケ！このクソババアどもめ！

そう心に思いつつも、俺は丁寧に1件1件テキパキと挨拶をした。なぜなら、その方が相手方も感心して、おやつをくれたりするからだ。

この日は10件ほど、お礼返し用の調味料セットを持って廻つたが、帰り道はもらったお菓子でいっぱいになった。

ちよろいもんだなw でもまあ、子供でいるうちの特権だからな。

俺はじいさんに買ってもらった新品の真っ赤なランドセルを背負って学校へ通っていた。服装も美香が選んだロリ系の可愛い洋服を着せられた。

さすがにこつ恥ずかしくて抵抗はあったが、美香との約束もあるし、俺はフリフリのスカーートを履かせられても我慢した。

そういえば美香のやつ、昔からロリータファッションが好きだったんだよな。

4月の終り頃になると、家庭訪問が始まった。

俺の家の順番は初日の4件目。

うちの担任の先生は、36歳独身の小太りな男で、モテそうな感じではなかった。見た目はオタクっぽくて、家で人形の着せ替えてもしてそうな男に見えた。

美香もこの担任は生理的に受け付けしづらそうで、彼が座った位置から少しあらずさりして、腰をおろしたようだった。

「あの・・・お子さんはすごく優秀なようで・・・他の子より1歩も2歩も進んでるようなんですが・・・お宅ではどのような教育をなさってるんですか？」

と、担任が気持ち悪い口調で言った。

「は、はあ...いえ別にうちは・・・何にもしてあげてないんですけど？」

「それにしたって、ひらがなもカタカナもすいすい書いてるんですよ？新1年生とは思えませんよ」

俺は担任がいる応接間の扉に、外から耳をくつつけて、成り行き

を聞いていた。

「やっぱ字を書いたのがヤバかったな…」

「うちの子は私は言うのもなんですが、IQが高いように思えるんです。赤ちゃんのときからお風呂も喜んで泣かないし、2歳のときにはひとりでトイレも用を足してきたんです」

「ホホウ（」。」「＊）それはすごい」

よく覚えてるな美香のやつ。さすが母親だ。立って歩けるようになりや、いつまでも人にケツ拭いてもらいわけにもいかなかったからだよ。

でも髪を洗うのはめんどくさいから、まだやってもらってるけどねw

と、俺はひとり自分の心の中で弁明しているのであったw

「でもですね、ことみがトイレに行けたことはびっくりしたんですけど、なんせ体が小さかったですから、洋式の便器の中におしりからハマってしまったことがありますて・・・w」
と、美香は思い出し笑いしながら言った。

へ（」ω「——）へぎくツ！ そんなこと思い出させるなあああ〜！

「お子さんは今のところ、非のうちどころがないくらい活発で、頭の回転も良いので、あとは友達がもう少し増えればいいと思うんですが・・・」

「…え？ことみには友達がいらないんですか？」

「いえね、全くなってわけじゃないんですが、ことみちゃんはちょっとだけ、1匹狼的なところがありますて…」

「はい・・・わかるような気がします。。」

うん。当たり前だ。俺も自分でそう思うぜw

「でも全然問題ありませんから、お母さんは気になさらずに」

「はい・・・」

「じゃ僕はこれで。お邪魔しました」

担任が席から立ったので、俺はサヨナラの挨拶しに部屋へ入っていった。

「先生お疲れ様でした」

「おう、いたのか。そうだな。また明日学校でな」

そのとき美香が言った。

「先生、お茶でもいかが？」

「いえ・・・まだ訪問がもう1件あるので・・・」

「ママ、家庭訪問の先生ってあちこちでお茶飲んでるから、もうほとんどいらないかもしれないよ？」

「（ー」； ヒヤリ」

美香はたまに俺の顔を見ながら考え込んでいる。

担任が帰ったあと俺をじっと見つめていた。何か不安でもありそうなお目だった。

その日の夜、俺は先に寝かしつけられたが、夜中の12時ごろ、トイレに起きると、まだ部屋の灯りがあって、美香とじいさん、ばあさんたちがしんみりと話していた。

「でもどうして、ことみはこうも男っぽいのかしら？」

夜中の居間に、じいさんとばあさんと3人で、美香はため息まじりにこぼしていた。俺は扉の陰からそつと聞いていた。

そんな中、じいさんは樂觀的なセリフを言う。

「うーん。まだ1年生だし、そんなに心配することはないんじゃないか？」

続いてばあさん。

「自由奔放に育て過ぎたのかねえ？別にお前がことみをほつたらかしにしたってわけじゃないよ。あたしらから見ても、ことみはのびのび育つて来たからねえ」

「あたし、別に男言葉とか教えたわけでもないのにことみは平気でしゃべるし、たまにあたしのこと『美香』って呼び捨てにするし」

「生まれ持った性格かもしれんぞ」

「お父さんは何でもすぐ割り切れて考えられるからいいわね」

「言葉遣いってのは親が教えなくても保育園で覚えてくるからな。

それにテレビ観ても影響されるだろうが」

「じゃお父さん、もうお笑い芸人の番組とかVシネマとか観ないでね！ことみもそばで一緒に観て『乱暴な言葉』をすぐ覚えてしまうから」

「お笑いネタは関係ないと思うがなあ……」

俺はそばで聞いていてショックだった。俺の大好きなバラエティ番組が禁止されるなんて！美香よ、もつと楽に考えろよ。思いつめるなよ。。

「中学生になれば、変わってくるんじゃない？体だって変化してくるんだし、好きな男子だってできるかもしれないでしょう？」

「お母さん、それがね。ことみてなんか……男の子に興味なさそう

で。」

「そりやまだ1年生だもの」

「いえ、そうじゃなくて・・その・・女の子の方が好きみたいの」

「Σ(・・・*エエツ!?!でもそれはお友達って意味で好きってことでしょ?」

「それが・・あたし保育園の先生から何度が聞いてたんだけど、こ
とみがいつも一緒に遊んでたミホちゃんとか、ゆりかちゃん、もえ
ちゃんにキスしまくってたらしいの」

ぬおっ!ヤバイ!俺の行動バレてたのか。

ちくしょうめ!ちひろ先生チクリ魔だったのかあ!!

「キスなんてどこで覚えたのかしら?」

「お父さんがことみ可愛さにいつもペロペロ舐めてたから、覚えち
やったんじゃない?」

んなわけないじゃんばあさん!そんなこと思い出したくもないぜ
!じいさんの顔舐め攻撃には、吐き気や悪寒も我慢してるのによ。

「あたしが隣りに寝てるときだって・・知らないうちに胸をさわっ
てるのよ」

「おっばい飲みたいんじゃないか?w」

「お父さんっ!もうっ!」

「お父さんはほっというていいから。で、ことみはそんなことずっ
してるの?」

「たまゝにだけどね。でもその触り方が・・大人の触り方なの」
「??」

「えと・・あたしのおっばいをもてあそんでるような感じ?強弱つ
けたり!あたしの着替えをじっと見てたり。」

「ぶほっ!!!」

じいさんが飲んでいたお茶を噴出した。

「それはちょっと変わってるかもねえ．．頭はかなりいいみたいだけど」

「そうなのよ。なんせ、ことみは人並み以上に学習能力が高いみたいの。嬉しいことなんだろうけど．．でもなんか怖いわ」

俺は自分が思っていた以上に、まわりが深刻なのに気が付いた。まだまだ、自重しなきゃなんないのか。年相応に行動するってのがこんなに難しいとは。

俺はこのときの美香たちの会話を聞いて反省し、少しは真面目になろうと決心して、休みの日曜日にはしっかり勉強することにした。だが、１年生で習うことなんて、ひらがなの書き方と数字の数え方くらいだ。俺は時間がたつぷりあるせいで、退屈しのぎに数字を１０００までノートに順番に書いてしまった。

しかも漢字の書き取りも、１年生では到底習わないものまで、思うがままに書き連ねてしまった。そしてこれがまた、俺のうかつな行動だったのに気づいたときにはもう遅かった。

美香は電話していた。

「すいません。ことみの担任の先生のお宅ですか？日曜のお休みにすみません。ちょっとお聞きしたいことがありますて．．」

美香の顔は真剣だった。

「１年生で習う漢字って、昔に比べて進みが早いんでしょうか？」

「いえ、むしろ難しい漢字はカットされてるくらいで、今はごく初步の段階ですよ」

「じゃあ『新幹線』とか『小泉内閣』とか『徳川家康』っていう漢字は習ってないんですか？」

「あはははwwいきなりそんなの習うはずないでしょう！」

「そう・・・ですよね。。変なこと聞いてすみません。先生」

美香は早々に電話をきったが、思い悩んでいる面持ちは変わらなかった。俺はまたまた深く反省したが、美香の刺すような視線が来るだろうとあらかじめ予測していたので、電話を切る直前にたぬき寝入りをすることにした。

俺は芝居をしながら目を閉じて横になっていたが、それでも美香の視線がそがれているのを肌で感じた。

美香がひとりごとを言った。

「浩一・・・この子には浩一が乗り移ってるのかしら？」

第14話

美香の困惑

浩一が乗り移っている。。

美香からそんな言葉が出るとは思ってもみなかった。

俺は狸寝入りはしていたが、内心マジで度肝を抜かれていた。

でも、だからといってどうなるだろう？

『はい、そうですよ。俺は浩一さ。よくわかったな美香。』
とか言えるはずもない。

翌朝、俺は冷静になって考えてみた。

美香がほんとにそう思っているのか？

だとしたら、俺だってよっぽど事実を言いたい。

でも事実を知った美香はそれからどうなる？幸せか？

いや違う。悩み苦しむだけだ。我が子が、かつての恋人だなんて知れば想像もできないくらいショックと、これから先の生き方も

見出せるかわからなくなるだろう。

生き方としては、俺の今後もそうだ。このまま中学、高校、大学は行かないまでも、社会人になって、俺はそのときどうすればいい？がむしやらに仕事だけしてるつまらない人間になるだけか？

まわりから結婚もせかされるだろうが、俺は絶対男となんか結婚しねえからな！でも俺が女を好きになるってことは、世間的にはレズってことになるのか…

美香が俺の正体を知ったとして、今の俺が将来、結婚するとしたらどういう心境になるんだろう？想像を絶することだ。

まあいい、やっぱりしばらくは子供らしくしておこう。

いらぬ波風は立てない方が、美香にとっても俺にとってもいいのだ。

その年の秋、小学校に入学して初めての運動会がやってきた。

どこの学校もそうだろうが、前日に入場行進からの総練習があった。

俺は前世から徒競走は早い方なので、リハーサルでも楽しかった。だが、ダンスはダメだ。オクラホマミキサだなんて。今の時代もやってるなんて信じられない！マイムマイムもかよっ！こっばずかしくてできるか！上級生にやらせる！

とは思うものの、心とは裏腹に渋々やらざるを得なかった。

本番ではダントツで俺は1等。先生から走り方が男だと言われたW美香も、じいさんやばあさんも感激して喜んでくれた。

俺が1等になったら、じいさんが何でも好きなものを買ってくれと約束してたので、俺はパソコンを要求しようかと思っているのだが、多分無理だろうW

本番でのオクラホマ——は最悪だった。気色の悪いガキ共が代わる代わる順番に手を繋いでくる。なんでやねんと思うくらいに、汗ばんでネッチヨリした手……すかさず俺は相手の指先だけをつまむ。そんな中でも極めつけなのは、水っ鼻を拭いた手で俺と手を握ろうとしているクソガキだ。俺はそいつの手首をつかんでいた。よっぽどそのまま投げ飛ばそうと思ったが、思いとどまった。

その後、学習発表会の時期が到来し、1年生は、各クラスからの選抜で、器楽演奏することになった。何をやっても優秀な俺は当然選ばれた。

かつての前世時代、こんなに優遇されたことは全くなかった。

人生をやり直すのもいいもんだw 復習しながら生きてるようなもんだしな。

俺は木琴の担当になり、メインのソロの部分も任されて、そつなくこなした。元々高校時代、文化祭でドラムを叩いていた俺には造作もないことだった。

発表会当日も、美香が来てムービーに収めてくれていた。

美香はいい母親だ。仕事のかたわら、学校行事には必ず参加するし、お金もないのにこの日のために、わざわざ12回払いで、ビデオカメラを買ったし、ほんとに頭が下がる。こんな美香を悩ませたくはなかった。

しかし、俺はまた、うかつなことをしてしまったのである。

学習発表会が終って、みんなで音楽室に楽器を片付けに行ったときだった。俺は楽器の倉庫に初めて入って、真新しいドラムがあるのに気づいた。

すげえ…しばらく触ってもいないし…ちょっとだけ叩いてみつか
そのちよつとだけ叩いた曲がまずかった。

X-japanのYOSHIEKIが叩く激しいサビのパート…
いきなりのドラムの大音量に、同学年生も先生も全員、仰天して
しまった。悲鳴をあげる子もいた。

あ…やつぱまじかった…；^|^A アセアセ…

だが、まずかったのは、そればかりではなかった。

美香がビデオカメラで撮影したまま、会場からこの音楽室までつ
いてきていたのだった。美香が呆然としていた。彼女の仰天の意味
は、他の連中とは明らかに違っていた。

「浩一…なの？あなた。」

決定的になった。

俺がかつて美香の前で練習して聴かせていた曲だ。

俺はどうすればいい？どう言い訳すればいいんだ？

第15話

幽体離脱

そこに担任の先生が割って入ってきた。

「ドラムができるなんて驚いたよ。でもね、倉庫の楽器を勝手に触

つちやいけないな。クラスのみんなもびつくりしてるじゃないか。誰もドラムのうまさに驚いてるんじゃないんだぞ！突然の大きな音にびつくりしてるんだ。人に迷惑かけないことも覚えていかないとね。わかるね？」

「はい・・・ごめんなさい。先生」

「ほら、お母さんもこんなにびつくりしてるじゃないか。今日はもうこれで解散だから、お母さんと一緒に帰りなさい」

「はい先生」

なんとかこの場はしのげた。

その後、俺と美香は、手を繋ぎながら帰り道を無言で歩いていった。なんとなくいやなムードだ。美香は俺を横目でチラチラ見ている。案の定、美香がさっきの音楽室での質問を再び問いかけてきた。

「浩一なの？あんだ」

俺はしらばつくれるしかない。

「こういちって・・・ことみのパパのこと？ママ」

「・・・・・・・・」

美香は歩きながら考え込んでいた。そしてまた質問。

「ことみ、さっきのドラムはいつ覚えたの？」

この美香の問いかけに、俺は苦し紛れの言葉しか出なかった。まさにとっさに出た俺の白々しいセリフ。

「なんか・・・手が勝手に動いちゃって・・・知らないうちにドラム叩いてたの・・・あは」

そんなわけないだろ！と、普通の人なら当然そう思うはずだが、美香は真顔で驚き、本当に信じたようだった。

「パパが・・・ことみに会いに来てくれるのかもね・・・」

もつと手こずると思ったが、意外にもあっさり美香が俺の言い訳を納得してくれたので、俺にとってはこれでなんとか救われたようだ。

つまり美香の解釈はこう想像がつく。

俺自身である浩一が、ことみの体に突然進入してきて、たまに衝動的な行動をする。つまり浩一の霊のしわざ。

だから、ことみの心の中までが俺（浩一）であることには気づいていないということだ。

週末の土曜日、俺は美香に連れられて、墓参りに行った。

まさに俺自身の墓参りだった。前世の自分の墓を自分で見物するのはとても複雑な心境だ。

「ほらことみ。ここにパパが眠ってるのよ」

「うん・・・」

「パパが好きだったエビスビールも買ってきたからお花と一緒にお供えしましょう」

（！。。）オオ！　今ここで飲みてええ！

と、言うわけにもいかず、俺は生唾をゴックンと飲みこむにとどまった。

美香は丁寧に墓の周りを掃除して、お供え物をセッティングし、花をたむけ、線香とろうそくに火をつけた。

すると俺は急に、何か体がふわふわしたような、ものすごく心地よい気分になってきた。

「さあ、ことみ。パパに手を合わせてお参りするのよ」

「うん・・・」

美香が俺の墓前に手を合わせた瞬間、俺自身なぜか空から、墓参りしている美香とことみを見下ろしていた。そしてだんだんと俺は降下してきて、美香たちの押んでいる正面の姿を見ていた。つまり、墓側から見えていたということだ。

でも・・・なんか変だ・・・俺自身でもあることみが、美香と一緒に手を繋いで墓参りを終えて去ってゆく姿・・・俺はそれをここから見送っている・・・

なぜだ？なぜなんだ？俺はことみでもある。俺が今ここにいる以上、ことみがひとりで動けるはずないじゃないか？

そう思いつつも、俺はあまりの心地良さに、意識がもうろうとなり、そのまま眠りについてしまった。

俺が意識を取り戻して気づいたとき、なぜか俺は美香とスーパーに買い物に来ていた。

「ことみ！こんなにいっぱいダメ。おやつはどれかひとつだけよ！」

ん?????／（　・　）＼　はて？なんのことだ？

「さつきパパのお母さんから、おやついっぱいもらったでしょ！あなたのお婆ちゃんだけだね。カゴに入れたもの返して来なさい」

見ると、ショッピングカートには、ハローキティのチョコレートや、アンパンマンキャンディ、プリキュアガム、マジレンジャーズナックetc・・・がたくさん入っていた。

「さあ、早く！ことみ」

俺は理解できずにしばし茫然としていたが、美香の強制的な命令

にハッとして我に返り、品物を元にあつた場所に戻しに行った。

俺が全部このお菓子を運んできたって???うそだろ?

俺は寝てたはずだ・・・あ、でも確かにことみの体にはいなかったが・・・

でも今はこうして元に戻っている・・・

じゃ一体誰がこんなことを。。。

第16話

たえようもない不安

俺は今の自分自身が、知らないうちに記憶にない行動をしていることに衝撃を受けていた。

理由は何なのか?単に俺が健忘症になっただけなのだろうか?いや、それは違う。俺自身がそう思いたいだけだ。それですむならたいした問題ではない。

あるとき・・・自分の墓参りのとき、確かに俺は空気のような存在になって、墓側から自分の姿を他人のように傍観していた。そしてその自分が美香と一緒に歩いて去って行った。

つまり・・・別な誰かがいる!

俺は生まれ変わったはずだ。生まれた瞬間から俺だった。

だとしたら、俺は分身の術でも使えるんだろうか?

もし、全くの他人がこの体に入りこんでいたとしたらと思うと、言い知れぬ恐怖を感じてしまう。

数日が経って、その兆候が再び現れた。

学校も休みの土曜日、俺はいつものことだが、休日の朝はゆっくりと起きる。だいたい起床は9時頃だろうか。

この日もいつものように起きて、俺は美香におそい朝食を要求していた。

「ママ、ごはん食べる。」

「Σ（・・・*エエッ!？なんなの？ことみ。さっき食べたばかりでしょ！おやつと間違ってるんじゃないの？」

「????????」

「この子ったらもう。。食べ盛りなのはわかるけど、あまり太ってもらっちゃねえ」

「ことみまだなんも。。食べてないよママ。。」

「何寝ぼけてんの！さっきタマゴかけごはん食べたばかりでしょ！珍しく早起きしたと思ったらすぐまた眠くなつて部屋に行っちゃったじゃない！食っちゃ寝の繰り返しはいけませんよ！」

「.....」

この俺が・・さっき起きてメシ食ったって??

なんだか鳥肌が立ってきた。再び恐怖も感じてきた。

俺は何かの霊に取り憑かれているのか？

それとも部分的な記憶喪失のようなものか？

俺の不安をよそに、このような現象は度々起きていった。

しかも毎回朝で、俺が起きたときには、その不可解な行動はすでに終わっているようだ。

つまりいつも俺が知らないうちに、俺の体では朝食が済んでいるのだ。

俺の意識の中ではしばらく朝めしを食った記憶がない。

それなのに満腹感はあるのだった。

ある日の夕飯のとき、美香から面白いことを聞いた。

「あら、ことみ。せっかく食べ方が直ったと思ったら、また戻っちゃったのね？」

「σ(・・・)ン？なんのこと？」

「またカレーとごはんを全部ぐちゃぐちゃに混ぜてから食べてるでしょ！こないだの朝に食べてたときはきれいな食べ方してたのに」

「ふう〜ん。そうだった？」

「実はね、ことみのパパも何でも混ぜるクセがあつたのよ。納豆もそうだし、ごはんにかけるものは全てかき混ぜてから食べるクセだったの」

う・・美香め。よく観察してやがったな・・

「ことみは朝だけはマナーがいいのよねえ。逆に半分寝ぼけてるからかしらね？w」

どうやら俺の知らない人格が現れてるらしい。
ひょっとすると俺は多重人格者だったりして？

たとえそうでも、今のところ勝手に悪さするわけでもないし、あんまり気にしない方がいいかもしれない。精神的なことから現れてくる現象とも考えられるからな。

事実、俺のもうひとつの人格は朝のみで、他には特に目立った行動もせず、学校で現れることもなかった。

少し利口になった俺も、人より優れた行動を控え、美香やまわりに迷惑をかけることなく、自然な流れで月日が経っていった。

そして再び俺の体に変化が起きたのは、中学に新入学したば

かりの春先だった。

第17話

ことみと浩一

俺は産まれて初めて経験する生理に悩まされていた。

人によって痛みは個人差があるらしいが、俺はどうやら重い方かもしれない。腰は痛いわ、下半身がズンと重いわ、頭痛さえもする。女ってすげえやつかいな体してるもんだ。つくづく男だった前世をうらやましく思ってしまう。

ディスカウントのドラッグで初めて生理用品を選んでいるときは、自分が何か変態ばく思えて気恥ずかしくなった。今の俺は誰から見ても中1の女の子なんだから（しかも結構可愛いしw）堂々と買えばいいはずなのはわかってはいるものの、レジに誰も並んでいない瞬間を確かめてから、走ってその場に行き、精算してもらおうとすぐ足早に店から出たのだった。

しかしなあ、この俺が赤ん坊産める体になったなんてなあ。。でも絶対男になんか抱かれなないぞ！想像しただけで気色悪っ！

痛みがひどいときには美香から薬をもらって飲んだ。

そのせいか、薬が効いてくるとだんだんと頭がぼーっとしてくる。こんな日は早寝に限る。いつまで起きていても辛いばかりだ。

こうして俺が寝てしまうと、いつものように別な自分が決まって現れて、勝手に早起きをして朝食を食べていた。

でもここ最近では収まらないようで、夜中に部屋で本を読んでいるようだ。俺の机のスタンドが点きっ放しで、本を読んだ途中にちゃんとしおりが挟んでいた。

そんなある日、生理が収まって体が楽になった頃、俺の体からシグナルが発せられた。

それはうちのじいさんの誕生日を祝っているときだった。

美香が手作りのケーキを作って、口の臭いじいさんをはじめ、みんなで和やかに会話を楽しみながら食べていた。

美香のケーキはいつもうまい。俺の毎年の誕生日には必ず苺を年齢の数だけ載せてくれる。でもじいさんの場合はレーズンを年の数まで載せていた。さすがに苺をじいさんの年の数まで載せるケーキのペースなどないし、そんな贅沢はできなかったw

ばあさんも加えた4人みんなで小分けしてケーキを食べたのだが、まだテーブルの真ん中にはケーキが残っていた。でも今日はもう腹もふくれたことだし、残りはは明日にでも食べようと思った瞬間だった。

もつと!!

・・・え？

俺の意識の中に、明らかに別な声が響いてきた。

それはむろん、美香やじいさん、ばあさんには聞こえない。俺の脳の中核だけで感じることだった。

もつとケーキ食べたい！

『お前・・・誰だ？』俺は心で問いかけた。

すると、さつきよりは小声で未知なる相手から返答がきた。

『あたしはことみだよ』

『んなわけねじゃん！ことみは俺だ！お前はどつからこの体に入ってきた！？ずっと長年、朝めし食ってきたのもテメエだろが？』

『うん・だつて朝お腹すくんだもん・ごめんね。パパ』

『Σ―11（、；）――11パパって・え？？・え？？どうゆうことだ？一体』

『どうやらあたし、パパと体を共有してるみたいなのね？』

『エエエエエ（、Δ、）エエエエエ！んなバカなあああ！！ならなんで、最初から現れなかったあ？』

『そんなの無理よ。だつてあたしまだ赤ちゃんだったもん。言葉なんて知らないよ。言葉はみんなパパから徐々に教わったんだよ』

『そんな・俺は・生まれ変わったんじゃないのか？』

『あたしもよくわかんないけど、パパの力が大きすぎて、あたしがパパに入り込む余地がなかったの。』

『ずっと俺のしてきたことはわかってるのか？』

『うん。ずっとパパと一緒に体験してきたよ』

ガ ΣΣ（、Δ、；）ン！！

『だから途中であたしのパパだつてわかったんだもん。ママは可愛そう。。パパがここにいるとも知らないで』

『ちょ・ちよつと待て！でもな、俺がこんなしゃべりでここまで生きてきてるのに、なんでお前はちゃんとした普通の女の子のしゃべり方なんだ？おかしいだろが！』

『だつて・あたしだつてバカじゃないもん。ママの話し方や学校のお友達の方が女の子らしいってすぐわかったよ。だからパパの言葉遣いは間違ってるってわかったの！』

『それにしても・・これからどうすればいいんだ？』

『わかんないよ。でも今はママのケーキ食べたい。パパお願い』

『でもなあ、俺は腹いっぱいなんだよなあ・とりあえず部屋でゆっくり話そうや』

俺は立ち上がろうとしたが、体が思うように起こせなかった。

しかも自分の手が勝手に、ケーキに向って伸ばそうとしているのを明らかに感じていた。

俺ではない、真のことみの力が俺を徐々に支配し始めようとしていた。

『おい、ことみ。話し合おう。これからの俺たち二人のことを。。』
『はい、パパ。でもケーキ食べてからね!』

「ことみ、さつきから何ひとりでブツブツ言ってるの? ケーキ食べたいならさっさと自分で取りなさいよ。」

美香がそう言うと、俺の中のことみが大喜びしていた。

第18話

ひとりディスカッション

『あのさあ、俺がなんで中1になるまで1回も話しかけて来なかったんだ?』

『たまに話してたよ。でもパパには何にも聞こえてなかったんだよ。』

『じゃあお前はずっとこの13年間、誰とも会話をしなかったってことになるのか。。』

『うん…寂しかったよ。パパだけずっとお友達とかママやいろんな人としゃべれて。でもね、あたしは最近までそういうもんだと思ってたの』

『ん? そういうもんだって?』

『うん。パパとあたしの体と一緒になら、親が体を支配する権利があって、子供は自由にならないものなんだなあって』

『でも今はどうだ? お前はだんだん自分の意志で体が動かせるよう

になつてきているじゃないか』

『なんか不思議とそうみたい。でもパパ、これからあたしが何かしたいと思つたとき行動してもいいの?』

『ええ?そ・・そりや絶対ダメとは言わないが・・なんせ今は俺自身まだ戸惑っている段階なんだぞ!俺はこの体が自分自身ひとりのものだと思つて生きて来たんだからな。それが急にお前の存在がわかつて…』

『ねえパパ。あたしがまだ子供の頃はこう思つてたの。他の家の子もみんな父親と体を共有してるもんだつてね。でもね、学校に入つて父親参観のときに何か変だつて思つたの』

『うむ・・』

『どうやって共有している体から抜け出して参観日に来るんだろうつてね』

『それで、お前そのときはどう解釈したんだ?』

『んとね、すぐ思つたのは・・パパは1度死んでるじゃない?だから抜け出せる体がないと思つてたの』

『(* m *)ププツ　じゃ他の家にはお父さんの体をした抜け殻があると思つてたんだ?』

『うん。マジですつとそう思つてたよ』

『すごい発想だな。 ; ^ _ ^ A　お前天才かもしれんな。』

『でも13歳にもなつたらハッキリわかつたの。うちだけ特殊なんだなあって。それでさつきケーキ食べたいって意思をパパに思いつきりぶつけてみたの。そうしたらパパにあたしの声が届いたのよ』

『なるほど。そうだったのか…ひとつ聞きたいことがあるんだが?』

『なあに?パパ』

『俺は今までずつとこの体で生きてきたわけだが・・行動はともかくとして、俺の頭の中の考えも読めていたのか?そして今もか?』

『ううん。それは全然わからない。パパが行動に移すまでパパの心は読めないわ。パパだつてあたしの心は読めないでしょ?』

『うむ・・そうだな。わからん。つまり俺たちは一心同体ではない

わけだ？』

『そうみたい。二心同体ってことよね？パパ』

『ということになるか。脳のパターションでも分かれてるのかな？』

『でもパパが、女の先生をえっちな目線で見てたのはわかったよw』
Σ―11(―1；)―1ぎくつ！』

こうして二心同体の俺たちは、今まで生きてきた流れをさかのぼりつつ、お互いを納得させ、理解していった。

『さて・・・ことみ。問題はこれからだ』

『うん。体の分担のことね、パパ』

『そうだ。どっちがどうやって優先するかだ』

『パパ・・・できればあたしもそろそろ自由に動きたいよ・・・』

『そう・・・だな。』

俺は迷った。ことみの気持ちはよくわかる。今までが閉ざされた世界でひっそりと自分の意志も尊重されることなく生きてきたんだ。これ以上束縛するのも可愛そうだ。

しかし、そうなったら俺はどうなる？俺の意思は？

俺はもう死んでる人間だからそろそろ潮時ってことか？

たしかに俺はラッキーな2度目の人生を送っている。

ここでことみにすべてを譲ってもおかしくはない。

いや、親ならそうすべきなのかもしれない。

でも・・・でも・・・未練がましいかもしれないが、俺だってまだいろんなことをしてみたい！せっかくもらった2度目のチャンスをまだまだ生かしたい！これは俺の勝手なわがままなんだろうか？

『ことみ・・・こういうのはどうだ？体の優先権利を1日交代ってのは？』

『うーん。あたしもそれは考えたけど・・・1日じゃ短すぎると思う』

『そうか・・・じゃ、お前の希望を言ってみるよ』

『んと・・・せめて1週間交代で』

『1週間かぁ・・・長いな。』

『パパが我慢できなさそうね？』

『う・いや。よし、わかった。お前は今まで閉じこもった世界にいたんだ。お前の意見を聞いてやるよ』

『え？ホントにいいの？パパ。嬉しいー！すごく嬉しいパパ！ありがとー！やったああー！』

『その代わり、自分の順番で体を優先してる時、相手の邪魔は絶対しないように！』

『YES！パパ！』

『返事が軽いな。ホントにわかったのか？ことみ』

『オフコース！』

なぜか不安がよぎる俺。

本当にこんなんでうまくやっていけるんだろうか？

第19話

ジレンマ

「この問題は、さっき教えた基本をちょっと応用しただけなんだぞ！誰もわからんのか？」

5時限目の数学の授業だった。5時限目といえば、給食も終わって昼休みを思いっきり遊んだあとで、1番眠くなる時間帯だ。

そんなときに数学だなんて頭が働くはずがない。

しかしまあ、この程度の問題なら解けないわけでもない。

「おい、相沢！前に出てみんなにお手本を見せてやれ」

さっそくご氏名がかかった。

ちなみにこの物語で俺の苗字が始めて登場した。

そう、今この先生に呼ばれた通り、俺は相沢ことみなのだ。

そして俺自身、前世から見て2度目の中学生ということになる。
数学の問題も復習の意味もあつて、中1程度の問題なら簡単に解ける。

だからこの仏帳面な先生にも、俺のIQが高いとみなされていて、信用が高い。

「相沢、何モタモタしている？早く来て黒板の問題を解きなさい」

「は、はい・・・」

でも今週はまずかった。

この体の支配権は俺の娘のことみにある。
娘のする行動を邪魔してはいけない約束だ。

「パパ、パパ、わかんないよ。教えてお願い！」
ことみが脳に話しかけてきた。

「だって俺が口出したら違反だろ」

「そんなこと言っただって・・・あたしみんなの前で恥かくじゃない」
「ときにはそういうことも必要さ」

「パパのいじわるうゝ。ねえお願いだから教えてよゝ！」

「違反してもいいのか？」

「違反にはならないわよ。体はあたしが支配してるもの。脳で話すのは自由よ」

『そりや都合のいい解釈だなw』

『それに問題解けないと信用ガタ落ちだよ。来週まで引きずったまま、パパに支配権うつるんだからねっ！パパだってそんなの嫌でしょ？』

『まあ、そう言われれば、そうかもしれないな。じゃ教えてやるか』
『やった！すぐ教えてすぐ！』

『んじゃ言った通りに黒板に書けよ。まずは．．．
■ x e t c .
』

「うん…それで？…うん。そつかあ…え？ああ、なるほどね。」

「相沢、お前ブツブツ言いながら問題解くクセあったっけ？」

「あはw聞こえました？ちよつと難しいから色々考えちゃったんです。せんせw」

なんとかこの場はしのいだが、これからの授業もみんな俺が助っ人しなければならんだろうか？（「」；

それでも、どうしても助っ人できない科目があった。

体育だ。

頭脳では応援できても運動に至っては、体の権利が譲られない限り、どうしようもない。

先週の体育での跳び箱は、俺がなんなくクリアしたが、今週も引き続き跳び箱があつて、娘のことみは見事4段も飛べない始末だった。

先週との運動能力のギャップがありすぎて、さすがにまわりからも言われた。

「ことみ、何カマトトぶってんの？」

「ことみ、何でそんな芝居する意味があんの？」

さすがにこうまで言われると、本人はショックなようで、帰宅してから部屋でひとり、ことみは泣いていた。

『パパ・見てたでしょ。あたし悔しい！』

『そうだな・あれは辛いわ。気持ちがよくわかる』

『ホントにパパにわかってるの？あたしの気持ちが！』

『そ、そりゃ…』

『パパは何でも出来過ぎなのよっ！もって考えてよ！普通レベルでいいからあたしの過ごしやすいようにしてっ！困るよこんなのって！』

『……』

『あたしは目立たなくていいから普通の女の子として生きて行きたいの！それだけなの！』

『……悪かったことみ。俺は何も知らないで。』

ことみが泣き出した。

大粒の涙がたくさんあふれ出した。

体の支配権はことみでも、その感覚は俺にも感じられる。涙が口に入ってしまった。

翌朝、ことみはすぐ明るかった。

何かふっきたように朝食もおかわりするほど食べていた。

『パパ、昨日はごめんね。あたしまだ、自分の体に慣れてなくて・・あたしが努力してパパくらいの技量を身につければいいんだよね？』

『ことみ、そんなにあせらなくてもいいんだぞ』

『うん。でもね、よく考えてみれば、パパが支配権のときだろうが、あたしの支配権のときだろうが、この体はちゃんと覚えててクリア

してるわけよね？ということ、やっぱりあたしの意識の問題なのよ」

『うん・・・』

『この問題はあたし自身が解決することだから、パパは心配しないで。あたし頑張るから！そう決めたの！』

俺の娘は立ち直りが早いようだ。少し安心した。

いい子だな。ことみは。。

俺はつくづくそう思った。

この体の中で何年もの間くすぶっていたのに、世間に出て怖がらずひるまず、気持ちも前向きだ。

俺の方こそ逆に、ことみの重荷にならないようにしなければ。

それに…俺もいつかは完全に、この体をことみに返さなくてはならない日が来るだろう。

それがいつ、どんなタイミングのときに来るのかわからないが、そのときまでことみとの共有を楽しんで行こう。

その日まで。。。

第20話

思春期

間もなく夏休みに入ろうとする時期になっていた。

ここまで、ことみの体の所有権の交代制も順調に進んでいた。

期末テスト時期はことみがこなしたが、俺の手伝いもあって、学年順位はベスト5入りで満足した結果だった。だが、ことみ自身も勉強はかなり努力していたようだ。中間テストに比べれば、俺が助

っ人する場面は激減していた。

テストが終わると特に授業にも身が入らなくなっている。
どうせもうすぐ夏休みだし、次のテストは2学期だ。
こんな開放的な気分の中、登校最終週は俺がこの体の所有権を握っていた。

朝の登校時、この日は快晴で俺の気分もすこぶる爽快で、行きかう同級生たちとも満面の笑みで挨拶を交わしていた。

「ことみおはよう！」

「おはよう、みずき」

「ね、ね、里中くんだけどさ、なんかことみのこと好きみたいよ」

「Σ（・・・） ＊エエツ！？なんでそんなことわかるの？」

「んとね、ちよつと小耳にはさんじやったの。男子同士でね、どの女子が好きか話してたことがあったの」

「てか、選別してたってことね」

「うん。でね、ことみの評価は全員高かったんだよ」

「（・。・） ほー」

「その中で、ある男子が『相沢は男の前だけぶりっ子してないか？』って言ったの」

「なんだとおお！誰だその野郎は！！？」

「ことみ・・・言葉遣い怖いよ・・・；^|^A」

「あ・・・ごめんみずき。あたし気が短いの」

「うん、まあいいんだけど・・・でね、続きだけどそのとき里中くんが『相沢はそんな子には見えないな。ごく自然な笑顔で・・・俺は可愛いと思う。』って言ったんだって」

「へえ・・・里中くんねえ。。。」

俺にとっては中1の男子なんてみんなクソガキに見えるので、相

手にもしてないんだが、彼らは彼らなりに思春期に入ってきているようだ。

俺はことみに脳で話しかけた。

「ことみさあ、俺たちって可愛いから結構モテてるのかもなw」

「パパ、自惚れないで。あたし自分を可愛いなんて思ったことないよ」

「じゃブサイクだって思うのか？」

「そうは思わないけど・・・」

「ほら。やっぱり可愛いと思ってるじゃん」

「違うつたら！他にも可愛い子ならいっぱいいるもん」

「謙虚な奴だな全く」

こんな会話をしながら歩いていると、学校の校門に到着した。

今の時間は生徒が登校するピークでこった返している。

そんな中、なにげに上級生らしき男子生徒の群れを見ると、そこには見覚えのある顔があった。

「あれ？あいつ昔見たことあったような・・・」

と次の瞬間、俺の鼓動が『ドクン！』と鳴った。

「え・・・？なんで？」

俺自身がびっくりして、持っているカバンを思わず落としてしまった。

立ち止まって胸を押さえている俺をまわりの数人が気づいて振り向いた。その中に、さっきの見覚えのある男子の顔もあった。

次にだんだん俺の動悸が激しくなってきた。

『う・・・何なんだいったい・・・俺は病気なのか？変な病気に感染でもしたのか？』

「ことみ大丈夫？ 苦しいの？」

みずきが声をかけてくれている。

「うん。。でも…ちょっと落ち着いたかな」

「保健室行った方がいいよ、ことみ」

「うん。そうするかな…悪いけど先生に言っておいてくれる？」

「わかった。軽い貧血かもしれないね」

「…かもね」

とは言ったものの、貧血で心臓の鼓動や動悸が激しくなるものなのか？

1時限目が終る時間になると、保健室で仮眠していた俺はまるで何事もなかったように元気に回復した。

「相沢さん、もう次の授業に戻るわね？」

「はい。もう大丈夫です。ありがとうございました」

俺は保健の先生にお礼を言うと、部屋から出ようと扉を開けた瞬間、例の顔見知りらしい上級生が入ってきた。

「先生すいません。今やってた体育のバレーで突き指しちゃったもんで」

その男子がそう言いながら、俺の方を振り向いた。

俺はそのときまた、心臓の鼓動が大きくドツクンと鳴り響いた。

「お前…相沢ことみ…か？」

俺の動悸が激しくなった。

えええ？？何だよお？ 何で突然こうなるんだあゝ！

「人違いだったらごめん」

「いえ…そうです。相沢ことみです。。」

俺は胸を押さえながら返事をした。

「俺を覚えてるはずはないだろうなあ・・・まだ小さいときだったし」

「いえ・・・何となくは・・・」

「どっか具合悪かったのか？」

「はい…貧血かも?——先生、すいませんけど、もう少し休ませてもらえませんか？」

『ダメツ!! パパ』

『え?ことみどうした?』

『ごめんなさいパパ。あたしのせいなの』

『へ?』

『だからその・・・あたしが片思いの人が目の前にいるから。。』

『なに!!?この見覚えのある野郎がかあ?』

『うん。。パパその人、龍之介先輩だよ』

『ん??』

『ほら保育園時代、パパが1発でやつつけた人。。』

『（!o!）オオ! あの手タレガキかあ!』

『ハナタレじゃなかったよ。ハナクソはほじってたけど。。』

『しかし2歳のときのことをよく覚えてたなあことみ』

『だってあれは一生インパクトに残るよパパ』

『でもまあ、よりによって何でこいつが好きになったんだ?』

『だってそのとき以来、龍之介先輩はあたしに近寄らなくなったでしょ。でもあたしは見てた。おゆうぎ会でもすぐ目立っててカッ

コ良かったもん』

『ふうん・・・お前そんな見方してたのか。それでずっとその思いを中学まで持ってたのか?まさかなそんなこたあないだろ?』

『悪かったわねパパ。そうなんですっ!あたし一途なの!』

『こりゃごめん。。;^|^A アセアセ・・・』

『それで・・・中学生になって偶然見かけたとき・・・龍之介先輩のお

もかげもちゃんと残ってて、すぐわかったんだ」

『はあ、なるほど。それで相手も気づいてこっちを見つめてたから動悸も激しくなったわけだな』

『うん。今も恥ずかしい。。ドキドキする。一緒に部屋にいられない。パパ早く保健室出て!』

『しゃーないなあ。つたく…』

「先生、やっぱり2時限目から授業出ます。失礼しました。それじや龍之介先輩からです。」

「思い出してんじゃん。相沢」

「あは・・・あははは・・・」

俺は動悸もままならないまま、部屋を出た。

するとまたたく間に、心臓のバクつきもおさまり、いつもの健康状態に戻ったのだ。

ことみの初恋か・・・思春期だしな。

これからも色々ありそうだ。。

第21話〜30話

第20話までのあらすじ

女の子として新たな母体から生まれ変わってきた浩一。

しかし、その母親は前世時代の恋人・美香だった。

戸惑いながらも昔の自分の存在を明かさずにすくすくと育ててゆく浩一。

そんなある日、体が勝手に浩一の寝ているうちに別な行動をし始めていた。そう、今まで浩一の中で一緒に育ってきたことみ本人が、意識して体を支配できるようになったのだ。

自分が生まれ変わったのではなく、逆にことみに取り付いているのは自分だと気づいた浩一。

実の娘と体を共有する複雑な毎日だが、いずれは引き際が大事だと決意している浩一であった。

第21話

打ち合わせ

『なあことみ。あんなのどこがいいんだ？』

学校から帰宅した浩一は、部屋に入るなりことみに脳で話しかけた。

『かつこいいし、まつ毛長いし可愛いもん』

『バカだな。まつ毛長い男はスケべなんだぞ』

『そんなことないもん！、（、D、）ノプンプン』

『だいいち、ハゲじゃねえかよ！』

『ハゲって言わないで！野球部だから短くしてるだけじゃない！』

『どうも俺にはクソガキにしか見えんがなあ』

『パパは大人の目で見てるからでしょ！あたしはまだ中1なんだからねっ！龍之介先輩はすぐ大人に見えるもん』

『まあ中1から見りゃ、確かに中3はそう見えるかもな』

『でしょ？パパだって前はそう思ったはずだわ』

『うむ。で、これからどうする気だ？』

『どうするって・・・わかんない』

『なんなら俺が龍之介に告白してあげようか？』

『やだ！やめてパパ。まだいい…』

『いいのか？他に彼女できたらどうするんだ？』

『んっ。。なんかね、そうゆうんじゃないって・・・憧れだけで満足できるとゆうか・・・』

『（。。。）ほー、意外と地味な子だなことみはw　つまり恋愛にまでは発展しなくていいと？』

『う、うん。パパ恥ずかしいよ。そんなことあまり聞かないですよ』

そうだった。ことみはまだ中1の純粋な女の子なんだ。俺がちょっとかい出すと傷つく可能性もあるしな。余計は介入はしないでおくか…

『それよりパパ、夏休みにクラスのキャンプがあるでしょ』

『おう、そうだったな。もうすぐじゃん』

『うん。なんかおやつ買っておこうよ』

『前の日でもいいんじゃないのか？』

『思い立ったが吉日なの！今ヒマなんだから買いに行こうよパパ』

『でも美香におやつ代もらわないと金ないだろ？』

『ママは仕事の帰り遅いから無理よ。こないだおじいちゃんに肩叩きしたお礼にもらったお金があるよ』

『ああ、そうだったな。どこに置いたっけ？』

『本棚にある国語辞典に挟んであるよ。』

『そんなとこに隠さなくても美香は調べたりしないってw』

『ママよりパパの方が心配かもねw』
『俺は無駄遣いなんかしないぞ?』

スーパーマーケット内にて

『やだパパ!何それえ?』

『何って・・・さきいかじゃねえか!キャンプには欠かせないね!』

『もうダメだったらあ!酒飲みのつまみじゃない!』

『酒がなくなつて食えるぞ?』

『あたしそんなの食べたくなあい!好きなもの選ばせてよ』

『わがままだなことみは』

『パパばかり選んで何よ!しかもさきいか、ちーかま、バタピー、サラミ・・・全部オヤジ族のおやつじゃないの!』

『あれまwやつばそう思う?』

『o>(<)oモオオオッ!』

『わかつたわかつた!ことみが好きな言いなさい。カゴに入れてあげるから』

『じゃ、さきいかと取り替えてね!』

『Σ(・・*エエッ!?!さきいかは外せないぞお!じゃバタピー外すからそれでいいだろお?』

『じゃいいよそれで。あたしはまず・・・何かフルーツ系のキャンデイ食べたい』

『なんだ、飴かよお!食った気がしねえじゃんか!』

『おやつだからいいの!食べるのは夜みんなでバーベキューするんだからいいでしょ!』

『ビールがあればなあ・・・』

『パパ、絶対ビールなんて持って行かないでね!』

『はい・・・シヨボン。。』

『あとね、チョコレートもいいんだけど溶けちゃうしね。クッキー

食べたいな。パパ、ブルボンのチョコチップ買って」

「いいのか？ そんな甘いもん。太るぞ？ w」

「う… そ、そうね… じゃナビスコのリッツでいいよ」

「おお、それなら塩味のクラッカーだし、味もうまいな！」

「なんかパパのペースに乘せられっぱなしみたい。。」

「気のせいだ。ことみw」

「それとパパ。もうひとつ話があるんだけど。。」

「ん？ なんだ？」

「バーベキューの日はパパが体の利用者なんだから、食べすぎないようにしてね。次の日から週代わりであたしが体の利用者でしょ！
パパいつも食べすぎるから次の日あたし苦しいの。もっと体をいたわって。」

「（・A・）ノ はい」

なんか娘に説教されてるみたいだ。（A ; ;

第22話 サマーキャンプ

夏休みに入った7月後半、俺たちのクラスは予定通りにキャンプ地へ向った。場所は山奥の避暑地。

個人的には山より海の方が好きなんだが、担任と親の話し合いで決定したことだから仕方ない。

行きのバスの中では早速おやつの食べまくりから始まっていた。
生徒同士ではおやつの交換も当然のように行われている。
そんな中、あまり言われて欲しくない一言が発せられた。

「ん？なんかイカくさくない？」

「あ、ほんとだ！イカくせえ。誰かイカ食ってんのかよ？」

俺はおやつに買っていたさきいかを食っていた。

「あ、相沢だ！相沢がさきいか食ってやんの！w—*、m、ノミ
プププ！バンバン！」

「だって好きなんだもん。悪い？」

「お前、酒飲むつもりかよw」

「飲みたいけど中学生だから我慢してるのよ」

「ひえー！（0）大胆発言だあ！」

「坂井君、食べたいならあげるよ？ほれ」

「ちよつ…ちよつとパパ！その言い方ヤメテ！」

「ことみが脳で話しかけてきた。」

「ん？どしたことみ」

「その開き直った話し方ヤメテよパパ。あたしはまだ13歳なんだよ！13歳の女の子が同級生の前でさきイカなんか食べないよ！“ほれ”とか言わないし」

「個性があつていいじゃん。それにみんな同じおやつだったらつまんねえぞ？」

「おやつで個性なんか出さなくてもいいの！o>(<)oモオオオオ
ッ！！」

「相沢って見かけによらずオヤジくせえw」

「さきイカの味がわからないんじゃない、坂井君もまだ子供ね」

「お、ゆつてくれるじゃん相沢」

「パパ、このままだとあたし、生意気な子になってみんなから嫌われちゃうよ。お願い、ヤメテ。」

『あ、ああ…俺もクソガキ相手に暇つぶしもしてらんねえからな。もうやめるよ。ごめんなことみ』

ちようどそのとき、俺のことが好きだと思われる里中が割って入ってきた。

「坂井、誰が何食おうと自由だろ。女子相手に目くじら立てるなんてみつともないぞ！俺だってさきイカは大好きだ！何か悪いか？」
「いや。。別に・・・」

坂井は自分の席に向き直っておとなしくなった。

「里中君、ありがとう」

「気にしない気にしない」

「お礼にさきイカ少しあげる。はい」

「はは・・・ありがとう」

俺はことみに脳で問いかけた。

『おい、龍之介なんかより里中の方が良くないか？』

『うーん。。まだよくわからない人なのよねえ里中君て』

『まあ確かにクラスではあまり目立たないが、随分正義感は強いんじゃないか？』

『そう・・・かもね。。』

第23話

サマーキャンプその2

真夏の炎天下が続く中、確かにこの山の避暑地は涼しかった。
結果論とはいえ、やっぱり海のキャンプだったら肌が焼けすぎてひどい目に遭っただろう。山でホントに良かったw

夕方からのバーベキューはとてもにぎやかだった。

献立に鍋物をしたときに決まって鍋奉行がいるように、ここでも焼肉奉行がいた。お世話好きな女子が、焼きあがった肉や野菜を順に取り分けてくれる。俺はそんな給仕のようなマネをするタイプじゃないんで、こんな子がそばにいて非常に便利だった。

『パパ、パパ。あんまり食べすぎないでね。女の子なんだから食意地張つてると目立つちゃうよお』

ことみが脳に話しかけてくる。

「相沢よく食うなあ。ヤセの大食いってやつか？（＝・m・）ウププ」

「ベーだ！ほつといてよ。」

「相沢、お前が大好きなイカも焼いてるぞ！アッハハハ！」

『ほらパパ、言われちゃったあ。恥ずかしい…』

『じゃイカ食べないでおく？』

『え？ひとくちは食べようよパパw』

『（＊ m ＊）ププツ そうこなくっちゃ』

満腹になって動けなくなった頃、男子の里中がこっそりそばにやって来て俺に耳打ちした。

「話があるんだ。バーベキューの片付け終わったら、向こうの丘の上の木の下に来てくれないかな？」

「いいよ。みずきも一緒でいい？」

「できれば1人で・・・みんなにも内緒で」

「（・・・）ふうん。わかった。じゃあとでね！」

「おう」

1時間後、俺が約束通り指示された場所に着くと、里中はもう先

に来ていた。手には封の開いた缶ビールを持っている。

「里中くん、お酒飲んだの？」

「ああ、家からこっそり持って来たんだ。悪いかな？」

「いえ、うらやましいなあって」

「（ノ——）ノコケツ——」

「でも家から持って来たんじゃないやぬるいでしょ？おいしいの？」

「うまいとかまずいとか・そんな理由で飲んでるわけじゃねえさ」

『うわゝすげえ中1だなこいつ』

『なんか怖いねパパ』

『いや別に怖かねえんだけど、里中にはいいイメージがあつたのに残念だよ』

里中が缶ビールを一気に最後まで飲み干すと、ゆっくり俺を見据えて近寄って来た。

「里中くん。目がすわってるよ？」

「相沢・俺・俺・俺・お前が好きだ！」

「里中くん、目が怖いよ。もっと普通のときに言つて！」

どうせこいつは酒の力でも借りなきゃ告白なんてできないガキなんだろう。しよせん中1のクソガキか。

「相沢、お前は俺のことをどう思う？」

「どうって……里中くんの気持ちは薄々気づいてたけど……」

「そっか、そうだったか！相沢・キスしていいかな？」

里中はいきなり俺の両肩を捕まえた。

「ちょ・ちょっとあゝあたしまだ返事してないよ！」

「いいだろ。俺の気持ちわかってんなら」

『ヤバイよパパ』

『あとで謝つとくか？』

『そうじゃなくって・・・今日はデニムのミニはいてるんだよパパ。なんでみんなの前でハイキックなんてするのよっ！』

『あ、そうだった。忘れてた』

俺は呆然と見ているクラスメイトたちに問いかけた。

『もしかして・・・見えちゃった？あはw』

『うん。バツチリ』

『見せてもらっちゃったw』

『色もわかるよw』

『ことみって・・・大胆ね；^|^A』

『ほらパパあ・・・明日からあたしが体の支配権なんだからねっ！恥ずかしくてみんなの前に出られないよお』

『だいたいお前がデニムのミニ履くってきかないから仕方なく履いて来たんじゃないかよ』

『だって可愛いんだもん』

『山にキャンプ来るのに素足のミニなんて、虫に刺されに来るようなもんだろが！』

『でもクラス全員にパンツ見られるとは思ってませんでしたよーだ』
『！』

その後、里中はすっかり酔いが覚めたようで、自分のテントで一言もしゃべらず沈んでいた。

『もうやつは近づいて来ないさ、ことみ』

『明日、からだ入れ替わりたくないー！い！（トトトト）エーン』

第24話

ことみの受難

キャンプから帰った翌日、クラスメイトで親友のみずきが遊びに来た。というよりも俺の様子が気になったのかもしれない。

里中をぶつ飛ばしてケリも入れて、俺自身はすつきりしているのだが、次の日に体の支配権を交代したことみはかなり沈んでいたのだ。

みずきを部屋に案内して、ことみはコーヒーとお菓子を用意した。
『パパごめんね。パパはブラックが好きなんでしょうけどあたしは甘いのが好きなの』

『俺に構わなくてもいいぞ。俺は引ッ込んでるからみずきと楽しく話せや』

『うん』

「ねえことみ、まだ元気なさそうだね。里中くんのこと気になる？」
「…うん、ちよつとね。あのあと一言もしゃべってないし、2学期になって教室で会ったらどう話せばいいのかって」

「里中君、ビール飲んだから先生に激怒されてずっとテントの中で謹慎だったもんね」

「あーどうしょお・・・」

「ことみが悪いんじゃないからいいじゃない。下着見られたのがショックだったの？」

「もちろんそれもあるよ」

「おかしいよね、ことみって。あれだけ大胆なことができてケンカも強いのに、あとからすぐクヨクヨしてる」

「だってそれは・・・」

「ん？」

「いえ・・・そ、そりゃ反省するよあたしだって。暴力はダメだもん」

「なんかこんなことみてさあ・全く別人のときあるよね」

「Σ―11(「」;)――1え？」

「おしゃべりで言葉遣いが男みたいなきもあれば、ナヨナヨしてるときもあるしさ。ひよつとして・ことみてうつ病？」

「そ、そうなのかなあ・・・」

「だって極端に違うんだもん。体育のときだってそうだし」

「体育って？」

「体育でバレーしたときだって、ことみはあんなにすごい回転レシ―ブしたり強烈なスパイクも撃てたりするときもあればさあ・・・」

「・・・」

「別な日になると運動オンチみたいになってる。みんな病気がなつて心配してるんだよ」

「あたし・・・体調の変化が週で激しいのw」

「週で？生理でもなく？へえ・・・そんな人っているんだあ・・・」

「心配してくれてありがと。嬉しいよ、みずき」

「(#^・^#)えへ。あ、このバスケットおいしい。何て言うの？」

「明治のマクビティ・ブルーベリーバスケットだよ。コーヒーとあうでしょ？」

「うん。とっても。今度あたしも買おつとw」

ピンポン♪

「え？誰だろう・・・宅急便かな？みずきちよつと待っててね」

「うん」

玄関を開けるとそこには里中が立っていた。

「！――！！」

「あの・・・相沢・・・その・・・ご、ごめん。。俺が完全に悪いと思う」

「いえ・・あたしもひどいことして・・痛くなかった？」

「思いつきり痛かったさ・・でも・・やっぱ俺が悪いし」

「お互いもうなかったことにしようよ。あたしだっていつまでも気まずいのやだもん」

「あ、ああ・・許してもらえるんなら・・」

「うん。いいよ。これから普通に話してね」

「普通・・ってか俺・・やっぱ相沢が益々好きになったんだ。」

「エエエエ（´Д、）エエエエ どうしてえ？」

「なんかお前に顔面蹴られて鼻血出したとき、痛かったけど嬉しかったような・・」

「ひえー！（ 0 ）里中君でMだったのぉ？」

「知らないよそんなの」

「里中君もひよつとしてあたしの・・見えちゃった？」

「見えたよ一瞬。苺のパンツだったろ」

「なんで一瞬でそこまでわかるのよっ！もうっ！」

「とにかく今日はお詫びが言いたくて来たんだ。じゃこれで…」

「あ…うん。。わざわざありがとう」

里中は静かな足取りで帰って行った。

「ことみ、良かったね。聞いてたよ」

みずきが嬉しそうに微笑んでいた。

「うん・・ちよつと怪しい部分もあるけどとりあえずはね・・」

「じゃあたし帰るね。ごちそうさま」

「え？もう？」

「気になるからことみの様子をちよつとだけ見に来ただけなの」

こうしてみずきも帰って行った。

少し気が晴れたことみは部屋で読書をしたりして、夕方まで部屋でゆっくりと過ごした。じいさんとばあさんは町内のゲートボール

大会で留守。先に母親の美香の方が仕事を終えて帰ってきた。

「ただいまー。ことみいる?」

「部屋にいるよーママ」

「あのね、ちよつと話があるんだけど・・・」

「ん? なあに?」

「こつち来て座つて。ほら」

ことみはリビングで美香と差し迎えて座る。

「ことみ、驚かないで聞いてちょうだい。ママね・・・」

「なんなの?」

「ママ、再婚しようと思つてるの」

ガ ΣΣ(。Д;) ン!!

「ことみは他の子よりも大人だからわかつてくれると思つたの」

「あたし・・・あたし大人じゃないよお・・・大人はあたしの中のパパだもん」

「え? なに?」

「いえ・・・あの・・・何でもない」

「今度、この家に連れて来るから会つてね。お願いことみ」

ことみの中に引つ込んでいる俺もことみ以上にショックだった。いくら大人の俺だって・・・美香よ、俺は今だってお前を愛してるのに。。お前のそばにいたいのに。。

とうとう美香のお相手と面会する日がやって来た。
どうやら相手のおごりで外で食事をするらしい。
この体の支配権はまだことみにあった。

ちようどいい。俺に支配権があつたら何をしでかすかわからないし、破談にしかねない。

『ことみ。今日はよろしく頼むわ。俺はずっと引ッ込んでしゃべらないから。』

『パパかわいそ。。でもあたし、悪いけどすっごく興味あるんだ！ウキウキしちゃう』

『Σ―11（、；）―1ダブルショック・・』

『ちよつとおめかしして行かないとね』

ことみは鏡の前でお気に入りの洋服を数着取り出しては何度も組合せを試着し直す。

『おいことみ・・それで充分可愛いつて。もういいだろう？』

『もう、パパはせっかちなんだから！先週なんかパパったら破れたTシャツそのまま来て外出したじゃない！やめてよね。ああーいうの』

『ワイルドでいいじゃんかよお』

なんとか着ていく洋服も決まり、美香とことみと体の支配権のない俺は、時間通りに待ち合わせの約束をした店に着いた。

美香が店員に名前を言うと、すでに相手は到着して、奥の座敷に待機しているらしかった。

『ちよつとパパあ。落ち着いてよ』

『なんだよ。俺は何もしてねえぞ！』

『もうあたしの心臓バクバクしてるよ！パパのせいだからねっ！何

とかしてよ!』

『そんなこと言っただってよお・・・』

「ことみ。ママの彼にちゃんと挨拶できるわよね?」

「うん。あたしは平気」

店員が座敷の障子を開けて、俺たちを中に通す。

そこには初対面の美香の彼氏が腰を降ろしていた。

「よく来てくれたね。ことみちゃん・だったね。初めまして。安德寺ミツルと言います」

「・・・」

「ことみ、どうしたの?挨拶は?」

「あ・う、うん。初めまして。ことみです」

「この子ったら珍しく緊張してるみたいだわ。ごめんなさい。安德寺さん」

ことみは別に緊張などしてはいなかった。ただ、初対面とはいえ、相手のイメージと印象があまりにも予想とかけ離れていたからだ。ことみの裏にひそんでいる俺でさえ仰天したくらいだ。

なんで・・・なんで坊さんなんだよおおおおお~~~~!!

「あははは。無理もないね。この格好じゃ。本当はちゃんとスーツで来る予定だったんだけどね、急な代理の法事があつてね。急いでお経読み終えてここに駆けつけたとこなんだ」

そう・・・まさにお相手さんは、まんまの格好なのだ!」
「D」 ; ; ;
しかも・・・スキンヘッド。。

今どきの坊さんでもスキンヘッドなんて滅多にいねえよおおお!

ことみだつて固まるのも無理はない。

「なんか僕、いきなりことみちゃんを驚かせちゃったみたいだ」
「最初でわかった方がいいのよ」

と、美香はあっさり言う。

「ことみ。ママね、見た目にはこだわらないの」

「美香さん、手厳しい言い方だなあ・あはは」

「あ、ごめんなさい安德寺さん。悪い意味で言っただんじやないの」
「それはわかってますよ。僕自身、決して男前じゃないしね」

『男前どころじゃないぜ。タヌキじゃん！ことみ、どう思うよ？』

『うん・見た目は抜きにして、きつとすごく優しい人なのかも・』

『

『いちお、フォローしてるんだな』

『でもさ、パパのときだつてママに見た目にはこだわらずに選ばれたんじやないの？w』

『へ（ω――へぎくツ！そういうことになるんかいっ！』

『ごめんウソよ。パパの昔の写真見たもん。カッコ良かったよ。きつとママの趣味が変わったのよ』

『うーん・でもなあ。。俺よりカッコいいやつなら憎たらしくても敗北は認めるが・寺の坊さんとは・非常にびみょーだ』

『あたし、安德寺ことみになるのね。なんか違和感があるわ』

『モロ、寺の娘って感じじゃん（ー；』

「ねえことみ。ママ…幸せになつてもいいわよね？死んだパパのことも決して忘れたわけじゃないの。でも・頼れる人もいなくてあなたを育ててここまで来て・もう1度ママ、再出発したいの。わかつてことみ…」

そりゃわかるけど・なぜ坊さんなんだよお？

俺とことみはきつねにつままれたような不思議な気分がに駆られるつも、とりあえず無難に食事を済ませたのであった。

第26話

浩一 の 存在 価値

美香の再婚を前提とした相手、安德寺ミツルという坊さんは、ちよくちよく家に現れて、俺たちと食事をするようになっていた。うちのばあさんやじいさんにも印象が良く、この坊さんは自然な流れでうちの家族に打ち解けていった。

じいさんは言う。

「これで墓の管理の心配もなくていいわい」
ばあさんも言う。

「法事を忘れる心配もないしねえ」

なんだよ。そんな理由で喜んでるのかよ！

しかしまたこの坊さんは大食漢だ。出されたのもは何でも食うし、食うのがまた早い。おかずを一口つまむとメシを一気にガバツとかき込む。

頬を膨らませながらクチャクチャ食うさまを見ると、見た目はタヌキだが食事の時間は豚野郎に見える。

しかもこいつは生臭坊主だ。肉食も平気で、自身こう言っている。
「僕は魚よりお肉大好き人間でねえ。がはははは。なかなか精進できませんよ」

美香はこいつのどこに惚れたんだろう？
てか、惚れる要素がどこにあるのか？

『なあことみ。これからこの坊さんと一緒に暮らしていけそうか？』
『ママの決めたことだから。あたしはあたしで好きにするからいいよ』

『おいおい、意固地になるなよ。嫌ならはつきり言ってもいいんだぞ』

『あたしは・・・なじめそうもないけど。でもママには幸せになつて欲しいもん。今まで夜遅くまで残業したりしてあたしのために頑張ってきたのわかってるし…何も言えないよ』

『そっかぁ・・・』

『パパの方がつらいんじゃない？このままで耐えられる？』

『うん。そうなんだ正直。美香がこのままあの坊主とベッドを共にするのを想像すると…』

『もうっ！パパそんなやらしいこと考えてたのっ？』

『普通ならやっぱ考えちゃうさ』

『あたしまだ中1だもん。知らないっ』

ホントに俺はこれからどうすればいいんだろう…

と言ってみてもどうにもならないこの立場。

でも・・・でももし俺の意思通りに行動できるとしたら…

俺は美香が正式に再婚した段階でこの世界から消えよう。

ことみだって俺に体を利用されなくなるわけだし…

それが1番良い形なのは確かだ。それが自然なんだ。

俺はこの世界にはもういらないかもしれない。

いや、本来ならいるべきではなかったんだ。

それが13年間も。。

美香と坊主の夫婦仲むつまじい姿なんて見たくない。
矛盾してはいるが、でも美香には幸せになってほしい。

俺は天から美香とことみだけを見守っていよう。

でも俺はそうなれる方法を知らない。

しかも天に行けるとも限らない。

地獄に落ちるかもしれない。

俺は複雑な心境に思いを巡らせながら、この日は静かに床についた。

第27話

適応か不適応か

あれから3年が経過した。俺とことみは高1になっていた。

母親の美香と一緒に安徳寺ミツルの実家である寺に来てからもう3年。

けっこういい暮らしをさせてもらっている。

この坊さんは次男坊のため、実家といっても同じ敷地内にある「ハナレ」に住まわせてもらっている。そのため、この坊主の親と同居しなくても良いので、それほど気を使わなくて済んだ。

ハナレも大きく、俺とことみに与えられた部屋も、美香たちの寝室まで渡り廊下を歩いてかなりの距離にあり、俺としてもよいな想像を掻き立てる夫婦生活音が聞こえずに済むのでホッとしていた。

しかしごくたまに、俺が夜中にトイレで美香と出くわし、髪や衣

服の乱れを見たときはショックを隠せなかった。

中3のとき、そんな気を紛らわすために受験勉強にはかなり熱が入った。俺よりことみ本人もかなり頑張ったようだ。

そしてその結果、県内3本の指に入る有名校に合格したのだ。

16歳になったこの夏休みも忙しく過ごした。

俺（withことみ）は野球部のマネージャーになっていたからだ。

家にすぐ帰るといつも坊さんがいる。決して悪い奴ではないのだが、俺には拒否反応があった。ことみは俺ほどもなかったが、母親は母親。自分は自分。つまり好きなように行動したい意思が強く、性格的にも大胆になっていた。

この日も野球部の合宿に同行し、この炎天下の中、選手たちのユニフォームの洗濯に明け暮れていた。

『なあことみ、俺洗濯苦手なんだよ。めんどいし、ドロでこ汚いもんばっかだし、汗くせえし・・・』

『じゃああたしと体の支配権交代する？その代わり洗濯終わったらまた戻りたいって言ってもダメよパパ！』

『そんなこと言わないさ。じゃすぐ変わってくれよ』

ことみとすんなり体の支配を交代し、俺は脳の奥に引っ込んだ。

ことみは洗濯を要領よく進めていった。しかもなんか嬉しそうだ。

汗だくになりながらも、楽しく洗濯できるなんて信じられない。

体の共有というのは、もちろんことみが疲れたら俺も疲れるし、ケガでもしたらことみも俺も痛い。

ただ、大きく違うのは精神面での痛みや疲れ。

俺が自分の意志で洗濯をしたとすると、疲れは倍増。だが、楽しみながら洗濯することみであれば、疲労も少なくて済むのだ。

なぜことみはこんなに積極的なのか？

それはこの野球部の中の3年生に、幼なじみの龍之介がいるからだ。

ことみがこの高校の入学を強行に選んだのも納得する。

そして、大胆さを身につけたことみは入学するとすぐ野球部のマネージャーに応募し、積極的に龍之介にアプローチした。

それが功を奏して現在、ことみは竜之介と付き合い始めているのである。

俺は気づいていた。もう限界かもしれない。美香のことだけじゃなく、ことみのプライベートに立ち入ることになる。

ことみと龍之介は今すごくいい関係だ。でも・・・でもことみには常に俺がいるから遠慮しているところがある。

龍之介がキスを迫ってきたときもうまくはぐらかした。

決してイヤではなかったはず。

それは・・・うしろに俺がいるからだ。ことみが体験することは全部俺も体験することだからだ。

練習がオフの日、龍之介の部屋に呼ばれたことみ。

支配権は当然ことみ。もう体の支配権の順番などなかった。

俺が表に出ればまた昔のように相手を張り倒してしまう。

でも辛い。。

俺は男の気持ちかわかる。

龍之介は今すぐにでもことみを抱きたいと思っている。

でも無理矢理はよくない。彼は迷っている。

ことみだって・・・抵抗する気などないのに。。

また俺のせいだ。。

『パパ・あたし、パパがいると・・彼に身を預けられないよ…』

つ、ついに言われてしまった。

『そうだよな…ごめんことみ。俺だってお前と龍之介のえっちなんで見たくないさ』

つい露骨なことを言ってしまうバカな俺。

『パパのバカ！もうっ！…恥ずかしくて顔から火が出そう…』

『ことみ、パパ真剣に考えるよ。この体をお前自身だけのものにしてあげるから。もう少しの間、辛抱してくれないか？頼む…』
『。。。。』

第28話

それぞれの思い

俺はずっと考えていた。ことみの体からどうやってたら抜け出せるのか。そしてもしそれができたとして、俺はその後どうなってしまうのか。

一抹の不安も感じる。でもこのままではことみの人生を台無しにしそうだ。高校時代が1番大事な成長期。曲りなりにも俺は父親。子供に不自由はさせたくない。

ここ数週間、俺は体を支配せず、ことみに任せて考えていたが、ことみが俺を哀れに思ったらしく、この日1日は体の支配権を譲ってくれていた。

それだというのにこの俺は、日曜なのに全く外出もせず、部屋でそのことばかりを考えていた。今物理的にしていることと言えば、自分でコーヒーを入れては何杯も飲みまくっていることだ。

ヒントになるのは、数年前の俺自身の墓参りのときに起きた幽体離脱だ。でもあのときは数時間後に再び自分の体に戻っていた。それを永遠に戻らないようにするためには。

『ねえパパ。。』

ことみが脳に話しかけてきた。

『ん？なんだ？どうした？ことみ』

『えと・・・あのね・・・やっぱり聞けないや・・・』

『なんだよ。よけい気になるじゃん。俺に遠慮はなしだぞ！』

『うん・・・でも。また次でいいよ』

『はつきり言えよことみ。俺とお前は一心同体だろが！』

『二心同体ですっ！』

『まあそれはそうだけだよ。。（ー）；』

『じゃあのね・・・』

『おう、なんだ？』

『パパ・・・えっちってそんなに気持ちいいの？』

『ぶほっ！！』

俺はコーヒーを噴出した。

『なんだよいきなり』

『だから言いたくなかったのよ。。』

『ああ・・・悪い悪い。お前がそんなこと聞くとは思ってもよらなかったんでな』

『だってあたし・・・龍之介先輩に求められたらもう断れないもん。でもあたしバージンだし、すごく痛いんでしょ？』

『俺は男だったからなあ・・・痛くはなかったが・・・』

『あたし、なんか怖いんだもん。みんなの話聞いとるとさあ・・・』

『ああ、お前たち女子が固まってしゃべるとすげえ過激なこと言ってたよな』

『あたしは過激じゃないよ。みずきとか柚穂だよそれは』

『なんて言えばいいのかなあ。父親である俺がSEXのことを娘に言うのもなあ・第一、まだ高校生の分際で不純異性行為をすること事態、許せることじゃないんだぞ』

『よくゆうわよ。パパの初体験はいくつだったっけ？』

『えと…16（A）（ズデヘへ』

『ほらあたしの歳じゃない！』

『がははは（A）（ズ』

『まわりの友達はどうバージン捨てた子いっぱいいるんだよ！』

『バカ言っな。そんなの早い遅いの問題ですることじゃないだろ！』

『そりやそうだけども。』

『人から遅れてると思ってSEXしたって気持ちもクソもないじゃんか。お互いの愛情を理解しあつて、気分が最高潮になり、そして流れに任せれば、どんな痛みだつて充実感や満足感、嬉しさに変わるんじゃないのか？』

『パパもそうだったの？』

『お、おう！そうだと（一；ヒヤリ』

『そうなんだ。。』

『でもことみが俺にそんなことまで相談してくれたことは嬉しかったぞ』

『だって…パパは20代後半で死んだんでしょ？ママは今40を超えてるもん。あたしとパパの方が年齢的に感覚が近いと思ったの』
『な、なるほど。』

『でも将来、このままの状態であたしがパパの生きてた年齢を超えちゃったらどうなるんだろうね？』

『…そうはならないさ。ことみのために俺は時期に消えるよ』

『あたし…体の支配は全て自由になりたいけど、パパとお別れしちゃうともう話せなくなるんでしょ？』

『そりやそうだろう。戻る体もないんだしな』

『パパの魂、どこに行っちゃうの？』

『そんなのわからんよ。俺は今ここにいるんだし、別に坊さんでも

ないんだからあの世のことなんて……あつ！」

『どうしたの？ パパ』

『ことみ、ヒントがある。あの生臭坊主なら何かわかるかもしれない』

『安徳寺さんのこと？』

『お前の苗字も今は安徳寺だろうが！』

『そうでしたwどうもまだ慣れなくてw』

『とにかく聞いてみたらいい。聞き方は……そうだなあ。。この世に彷徨っている魂を正しに世界に戻すためにはどうしたらいいですか？とでも聞きなさい』

『うん。わかった』

『よし。じゃ体の支配権はお前に戻す。頼んだぞ！』

『でもパパ……やつぱりあたし……寂しいよ。ずっとあたしが赤ちやんのときから一緒だったんだよ』

『じゃやめるか？ w』

『いやそれもやっぱし……』

『（ノ―ω―）ノバタ なんじゃそりや』

ことみはハナレの部屋から安徳寺ミツルのいる本堂へ向った。

第29話

訪れた運命の日

「あのあ……お義父さん。ちょっと教えてもらいたいことがあるんだけど。」

「ん？ どうしたことみ？ 珍しいじゃないか」

「うん。。あのさ……お義父さんはこの世に霊がいるって信じてる？」

「なんだそんなことか……勉強教えろって言われたらどうしようか」

「思ったよ」

「勉強だったらダメなの？」

「だってお義父さん高卒だし」

「あたしまだ高1だよ」

「高校のときは特待生だったから勉強しなくても良かったんだよ」

「そんなの初耳。何かしてたの？お経の暗記とか？」

「アホ！お経で推薦されるかいつ！昔は陸上選手だったんだ」

「へえー。人は見かけによらないもんだね」

「悪かったな。で、何が聞きたいんだっけ？」

「霊の存在のこと」

「あ、そうそうそれね。そりゃ当然いるさ。ただ霊の存在ってのは、誰にでも見えるもんじゃない。霊感の強い人ってよく聞くだろ？そういう人だけがわかるんだよ」

俺はすかさずことみの脳に囁いた。

『じゃこの生臭坊主は霊感がないんだな。 (＝・m・) ウププ』

『みたいね (* m *) ププツ』

ことみもすぐに同調した。

坊主は不思議そうに聞いてきた。

「でも何でそんなことを聞くんだ？・・・ことみひょっとして体に何か異変でも感じてるのか？」

「別にないけど。」

「ホントにそうか？それならいいが・・・以前お母さんから聞いた話を今思い出したんだが。」

「どんな？」

「ことみの体に、亡くなった前のお父さんが乗り移る瞬間があるって言ってたんだ」

「ふうん。」

「そのときって覚えてるのかい？」

「よくわかんない・・・でもそうだとしたらどうなるの？」

「だとしたら、お父さんはこの世に彷徨っていて成仏していない。ちゃんと拝んであげないとね」

「拝むだけでいいの？」

「お経を唱えて、家族全員が同じ時間に心ひとつになって正しく念じれば成仏すると思うよ」

「正しくって・・・何かおまじないでもあるの？」

「おまじないじゃないけど、ちゃんとした言葉を繰り返し念じるのさ」

「そつかあ・・・できるんだ。」

「そうそう、美香から聞いたが今年はそれこそお前の亡くなったお父さんの１７回忌じゃないか！いい機会だ。今年は私が法要してあげよう」

「いいの？」

「もちろんさ。ことみのお父さんの墓前にも、私が美香と再婚した報告をしなくてはならないし、それに・・・」

「それに？」

「お父さんの浩一さんて人は交通事故で亡くなったらしいね？」

「うん。でもお父さんが悪かったんじゃないくて、対向車がカーブを曲がり切れなくてオーバーランして正面衝突したって聞いたよ」

「それは痛ましい事故だったね。きっと浩一さんは自分が死んだことには気づいていないんだろう。だからことみの体に異変が起きるのかもしれないな」

『おい、クソ坊主！俺は自分が死んだことくらいわかってるぞこら！』

『まあまあ、パパ落ち着いて。天に行く方法がわかったじゃない』

『この坊主のお経くらいで効き目あんのかねえ。。』

「お義父さん、もしもあたしの体に死んだお父さんがいたとしても・

・このままじゃダメなの？」

「ダメだ。いずれことみの体に障りが来る！死んだ人間は、生きた人間を自分の世界へ引っ張ろうとするものなんだ」

「そ、そう。。」

「ことみは心配しなくていいよ。私がちゃんとするからね。これでお母さんも安心してくれると思うよ」

「うん。。」

×月×日 浩一の17回忌法要

この日はわずかな身内だけでおごそかに執り行った。

俺のこの世での存在はいよいよ今日を持って終ろうとしているのだろうか？

『パパ・・あたしなんか複雑。。』

『これでいいのさ。今までお前と一緒に過ごせて本当に楽しかったぞ』

『あたしもだよパパ。。ありがとう。でもごめんね。。』

『謝るのは俺の方さ。子供時代はお前の体を占領してしまつて、お前自身の思い出が作れなかった。。』

『ううん。そんなことない。お父さんのしたことはあたしの中に全部あるもん。2歳のときも保育園のときも小学校のときも・・全部あたしの思い出だよパパ』

『そうか。それを聞いて安心したよ。これからことみは自由だ。思う存分、自分の信念に従つて後悔しないように生きなさい』

『うん。。（。ー）ホロリ』

『泣くな！まわりから変に思われる』

『ごめん。でも..でもパパ。。涙が止まらないよ』

そんなことみに美香が気が付いた。

「ことみ、どうしたの？なんで泣いてるの？」

「だって・・・パパが。。パパが。。」

『おい！ことみゆうな！何血迷ってるんだ？』

「パパが。。パパが。。」

「パパがどうしたの？ことみ」

『ダメだって！絶対ゆうな！』

『パパ・・・いいの？これが最後だよ』

『何がだ？』

『浩一としてママと1度もしやべらなくていいの？もう最後なんだよ！今までだってママと何度も話したくて苦しんだでしょ？』

『・・・いや、話はいろいろしてきたさ。。』

『それはことみとしてでしょ！どんな形であれ、親子3人で一緒に暮らしてきた証をママにも教えてあげたいの』

『それはダメだ。。せっかく再婚した美香を迷わせることになる』

『だから、パパがそれに対してちゃんとした言葉で認めてあげるのよ。ママも再婚には随分悩んだと思う。パパのことが頭から離れなくてね』

『・・・・・・・・』

『ママも安徳寺さんもきつとわかってくれると思うよ』

「ことみ？具合悪いの？大丈夫？パパって・・・もしや。。」

「ママ。。今、パパと代わるね。最後だからしっかり話してね」

「え・・・？」

俺はことみと体の支配権を代わった。

「美香・・・同棲以来、ずっとお前とここまで暮らせて楽しかったよ」

それは紛れもなく「俺自身の声」だった。それはなぜかことみの

声帯から発せられているのではなく、霊声とでも言うのだろうか。とにかく俺自身も驚いた。

そしてそれゆえ、美香も俺のおふくろも、俺の存在に明らかに気が付いた。

「浩一・・・やっぱりずっといてくれたのね。」

「ごめんな。でも俺はもう必要ない。俺は何もできない。このクソ坊主に・・・いや、この安徳寺さんに幸せにしてもらえよ」

「もっと早くひとこと言ってくれたら。」

「いや、お前のためだ。過去に生きてはダメだ。前を見て行け」

「浩一かい？またお前の声を聞けるなんて・・・奇跡だよ。お母さん嬉しいよ」

「俺もだ母さん。でもお別れだ。いつもお供えしてくれてありがとう。これからも頼む」

「もちろんだとも・・・」

安徳寺ミツルが切り出した。

「このような現象に出会うとは。。まさにこの法要が浩一さんを成仏させる絶好の機会。みなさん、心をひとつにして念じて下さい。いいですか？」

「どう念じれば・・・いいんですか？」と俺のおふくろ。

「浩一さんに対して『成仏』と『昇天』というふたつの言葉を繰り返し繰り返し念じるのです。どちらが欠けてもダメですよ！」

同時に安徳寺の読経も始まった。

俺は宙に浮き出した。もちろんことみの体が浮いたわけではない。きつと俺の魂がことみから離れ始めたのだろう。

「美香。母さん。そしてことみ。。どうやら逝けそうだ。」

「パパ・・・サヨナラ。。今までありがとう。。」

「みんなさようなら。さようなら。俺の2度目の人生。」

そして法要が終った。。。。

「ママ。。あたしすごく体が軽い」

「そう。。本当に逝ってしまったのね」

「でも疑問があるの」

「え？」

「今までだって、3回忌や7回忌があったのにどうしてそのときパパは向こうの世界逝けなかったんだろう？」

「それはね」安徳寺が言った。

「それはね、浩一さん自身がその気にならなかったからだよ。そして我々も心底から彼の昇天を祈らなかった。まさかこの世に魂が存在するとは思わなかったからね」

「そうなんだ。」

第30話

転生

気がつくと俺は目の前の道路を見ていた。

なんだこりゃ？

しかも道路が手前に流れている。

おいおい、三途の川って実は道路のことなのか？と思った。

しかもちゃんと舗装してある上に中央線まである。

だがそれは違った。もうろうつとした俺の意識がはつきりしてくると、自分が今、ハンドルを握っているということに気が付いた。

あ！俺・・・今運転してるんだ。。。

なだらかな下り坂。数百メートル続いている直線道路。日が沈みかけている夕暮れ時。

この光景・・・なんとなく、見覚えがある。

たしかこの先の左手には簡易郵便局があつて、右手にはカーコンビニクラブがある。そしてその先は急カーブ・・・

——あつ！！！

俺は今の自分の立場がはつきりとわかった。
もしそうだとすると・・・

この先のカーブで対向車線をはみ出した車が来る！！

俺は自分が運転している車を減速して、簡易郵便局の駐車場に頭から停車した。すぐさま後ろを振り返ると、猛スピードで、対向車線より追い越しをかけながら走行している2台の車が、2列に並んで目の前を通過して行った。

や、やっぱり・・・
・・・ということは・・・俺は。。

俺はすかさずルームミラーで自分の顔を確認した。

(！。。) オオ！ 俺じゃん！！

まさに俺の姿は浩一本人、その人であつた。
夢かどうかかわからないが、とにかく俺は何かを確かめようと郵便局の中へ入った。そして壁に掛かっているカレンダーを見る。都合よ

く日めくりだった。

よしっ！こりや間違いない！ことみから離脱した17年前だ。しかも今日は俺の命日・・・いや、そうじゃない。

俺はさつき、あの車と正面衝突して死ぬはずだった。

でも俺は事故を避けた。運命を自分で変えたんだ！

俺はこれからも浩一として生きられるんだ！

やったああ~~~~！！マジで俺だあああ！！

俺はすこぶる上機嫌で、車の中で雄たけびをあげながら帰宅したのだった。

「浩一、おかえりー」

この時代、同棲していた美香が俺の帰りを待っていた。

「お、美香。若返ったか？」

「へ？あたしそんなに老けてた？」

「う・・・いや、その。いつにもまして可愛くなってw」

「バカw」

やばっ。。40代の美香を見慣れたせいだ（ー）； ヒヤリ

「あたし今日疲れちゃったよ。仕事きつかったあ」

「ん？どうかしたんか？」

「荷受係が欠勤してね。あたしが代役したんだけど、それが今日に限って重い荷物ばっかりで」

「そんな他の男に任せれば良かったじゃん」

「それがさ、ちょうど昼休みでみんなごはん食べに出て行っちゃっ

てあたしが留守番だったの！もう最悪！」

「・・・で、お前が運んだのか？」

「明日きつと筋肉痛だわ」

「バカ！何やってんだお前！腹にことみがいるのに——あ！」
「????何それ？」

「いやその・・・もし美香が妊娠でもしてたらと・・・」

「そんなことは・・・あ、でもそういえば今月まだ生理来てないかな？」

やっぱりそうだったか！死ななくて良かったホントに。

「でもことみて何？」

「あ・・・も、もし女の子ならことみがいいかなってw」

「きゃはははは（　　）ノノノ　名前まで決めてるのー？男の子だったらどうすんのよ？」

「それは考えてない」

「変なのー。浩一って」

「元々変だから俺w」

「でもさ。今の言葉なんか嬉しいよ浩一。もし赤ちゃんできてたら産んでもいいってことだよな？」

「そりやもちろん。大事に育てような」

「うん。ありがとう浩一」

まさに今が幸せの絶頂だ。かつては俺が死んで、どれほど美香に精神的ダメージを与えてしまったことか。

やり直せて良かった。神様・・・もしいたら心からお礼を言います！

数日後、美香が嬉しそうに俺に報告してきた。

「浩一、あたし妊娠3ヶ月だって。」

「やったな！美香。これからは特に体大事にしないと！」

「うん。でも浩一のカンで鋭いのね。わかってたみたいだもん」

「男のカンでやつかな」

「そんなの聞いたことないよー。（＊　m　＊）ププツ」

「そつかw あはははは」

「でさー、あたしのお腹が目立たなくならないうちに・・・式挙げない？」

「そう・・・だな。よし！大至急手配するか。忙しくなりそうだ」

赤ん坊が産まれるまでは、結婚式の手配やら段取りやらでハチャメチャに多忙な日々が続いた。それでもようやく主な行事を終え、ついに俺たちの赤ん坊が産まれる日がやってきた。

俺自身は、当然ことみの誕生日を知ってるわけで、仕事もあらかじめ休みをもらっていた。そして美香の陣痛がおきてから、迅速に行動して産婦人科に運び、そばにずっと付き添っていた。

数時間後、けたたましく大声で泣く赤ん坊の声がして、廊下で待っていた俺は歓喜の声をあげた。ここの病院は夫の立会いはできなかったからだ。

ひとりの看護師さんが分娩室から出てきた。

「どうですか？ことみは五体満足に、元気で産まれて来ましたか？」

「・・・あら。もう名前も決めていらっしやったんですか？でもよく女の子だとおわかりでしたね？」

「え？いや・・・なんとなく泣き声で・・・」
「A A アセアセ・・・」

「母子共にとても元気ですよ」

俺はことみと対面した。やっぱり可愛い。かつてこの体を支配していたとは。。

「美香、この子の名前はことみでいいよな？」

「（＊ m ＊）ププツ だってもうずっと前から決めてたじゃないの」

「そうでしたw」

——2年後

「じゃ、ことみのおもりよろしくね」

「おう！任せとけ！」

この日、美香は友達の結婚式に出席するため、俺は家でことみのめんどろを見ていた。2歳になったことみは前の世界同様、やっぱり可愛い。

以前の世界と変わったところといえば、あの口臭漂うじいさんとばあさんとは別々に暮らしているということだ。

俺はことみに絵本を読んで聞かせていた。

「おい、ことみ。ちゃんと聞いてんのか？」

「うん。聞いているよ。パパ」

「じゃパパの顔ばかり向いてるんじゃない！」

「だってえ。。」

「ん？パパの顔にこはんつぶでもついてるか？」

「ちがうよお。んとね、ことみが思ってたのはねー」

「うん。言ってみなさい。」

「パパはやっぱ写真より生で見た方がいいなって」

——は？

「パパ・ことみもう2歳だし、保育園に入らないと龍之介先輩に会えないよ。なんとかして」

ガ ΣΣ(。D。;) ン！！

「ことみ・お前ひよつとして・・」

「うん。そうなのパパ。あたしも赤ちゃんの体に戻っちゃったの。」

「んなアホなあゝ！」

「ママがいなくて言えなかったの。今まで隠しててごめんねw」
「いやはや・こりや参ったな。」

「でも現実のパパにだっこされて嬉しかったよ」

「あはは；^|^A それはそうとして、じゃあその時の16歳からのことみはその後どうなったんだ？」

「どうもならないよ。パパがあたしの体から抜けていなくなっから、みんなで精進料理食べてたのね」

「うむ。それで？」

「で、そのあとあたし、眠くなっちゃって自分の部屋に戻って寝たの」

「そかそか」

「そして気が付いたら・赤ちゃんだったのw」

「はあ？それだけかよっ！？」

「でもホントなんだもん」

「単純な話だが俺の心境はあまりにも複雑だよ（；；；）」

「最初はショックだったわ。でも今は違うの。パパと暮らせるし、あたし自身、あたしの意思で動けるし、ママは残業してまであたしのために苦労しなくてすむし・・そう思えばこの世界の方が絶対好き！」

「そうだな・・そうだよな。ことみはいつもプラス思考だな。パパも見習わないとな」

「そうよ。見習ってね！」

「とりあえず、お前が何かの事故で死んでから生まれ変わったんじゃないかって良かったよ」

「パパはやっぱり優しいね。大好きだよ」

「龍之介よりもか？」

「ううん。パパは彼の次」

「（（ノーω）ノバタ・でもことみさあ・・当分は年相応な言葉遣いにするんだぞ！」

「誰かさんの前例があるからわかってます！」

「げっ！Σ―11」　「：」―1・・・ことみにはかなわん。

（続く）

エピソード

エピソード

ある日の休日、俺は安徳寺ミツルがいると思われる寺を訪問してみた。

俺の運命は戻ったが、ここの坊主の運命は一体どうなっているのか気になったからだ。

俺は正面の門から大きな敷地内に入って辺りを見渡した。俺たち家族が住んでいたハナレなどは見当たらない。

「あのー、どちら様でしょうか？何か御用で？」

外側の渡り廊下からひとりの若そうな坊主に話しかけられた。

「いえ、用事ってことはないんですが…ここは安徳寺さんのお宅ですよね？」

「はい、そうです。お寺と自宅と兼用ですが。」

「あの…ミツルさんというお坊さんがいるのでは？」

「は？そのような僧はここにはいませんけど？坊主は私ひとりです。」

（「□」…！！ええっ？

俺は仰天しながらも再び問いかける。

「どちらか別なお寺に修行に行かれたとか？」

「いいえ。最初からいませんよ？」

「安徳寺ミツルっていう人ですよ？」

「…おかしいことを言う人ですね。私がここの住職の安徳寺ワタルです。私には兄も弟もいませんよ。」

ガ ΣΣ（。D（；）ン！！なんじゃそりゃあああ！？

「何か事情がありますね。とりあえずどうぞ、中へお入りになりませんか？」

「は、はあ…では遠慮なく」

俺は正面の大きな本堂へ通された。

何気に見渡すと、壁にでっかい掛け軸があるのに気づいた。俺がことみの体にいたときはこんなものはなかった。かなり古いものらしく色あせてはいるが、どこかの書道家が書いた凄まじく豪快な作品だ。

“満願”（まんがん）

そう、ただこの二文字の掛け軸。でもおかしいことに“満”の字の方がはるかにデカ文字だった。

「その“書”が気になりますか？」

「え？はあ…なんで片方だけ文字がでかいのかなあとハハハ」

「なるほど。それは書いた本人の思いが込められていたのですね」

「へえ。。」

「実は見ておわかりのように、それには筆者の名前が書いてないんですよ。誰が書いたかいつからここにあるのかわからんです」

「へ？どういうことですか？」

「私の父にも、祖父にも聞いたことはあるんですが、ずっと昔からあつたって言うんです」

「ひえー！（〇）そんな前から？で、どんな意味が？」

「言葉通りの解釈でいいと思いますよ。私が父から教わったのは、日々精進して修行に勤しみ、けがれなき心であれば、些細な願いも天に通じ、思いが満るであらう」

（。〇。；）ハッ！思いが…み、満る（ミッル）？

「でもまあ筆者はわかりませんが、これもひとつの謎として、調べる必要もないと思いますてね」

「全然調べてないんですか？」

「祖父が住職の時代に鑑定士に見てもらったことがあるそうです。

200年以上も前のだとかなんとか…」

「すげえ、それなのによく風化しないでここまで保存できてますね」

「それが不思議でなんなんです。昔からこのまんまなんです。…いや。。。」

「???何か？」

「その…別な意味で不思議なのは、逆にだんだんこの掛け軸が新しなくなっていくように見えるんです」

「Σ(・・*エエツ!?)」

「あ、こんな話しても信じられないでしょうから軽く受け流して下さい。今お茶でもお持ちしますので少々お待ちを」

そう言って住職の安徳寺ワタルは奥に消えて行った。

それなのに俺はお茶も待たずに勝手に寺を出て来てしまった。それどころではない心境なのだ。

確たる証拠があるわけではないが、俺に突然のひらめきが起こった。

何かに開眼したというか、不思議なことだが瞬時でその意味を悟ることができたのだ。

まるで誰かにテレパシーを送られたかのように…

以前から不思議に思っていたこと。ことみが簡単に俺の元に転生してきたこと。

彼女が事故か病気で死んだのでもなく、寿命をまっとうしたわけでもなく、いとも簡単に。。。

それに俺の転生についてもそうだ。そして美香の再婚にいたるまで。

”全てに安徳寺ミツルの存在”が関係していたんだ！！”

俺が思うに、この坊主は最初から実在しない人間なんだ。あるいは数百年前には生きていた人間かもしれない。

とにかく奴は俺を転生させようとしていたんだ。なら奴がそこまでするのはなぜか？つまり安徳寺ミツルは俺の守護霊かもしれないってことだ。

ということは、美香が奴と再婚したのも偶然ではなく必然ということになる。

俺がかつて死んで生まれ変わったのに対して、ことみが眠っているうちに簡単に転生してしまったのも、全ては俺を救うための役割、俺を事故で死なせないための役割を奴は担っていたからだ。

俺は公園のベンチにひとり座っている。じわつと涙が浮かんでいた。

感謝しなきゃな。もう”クソ坊主”とか“奴”とか言ったら申し訳ない。

『その通りっ！！』

「え？（―――）」

俺の脳内に突然話しかけてきた声。誰にも聞こえない、俺だけにしか聞こえない声。

それはまさに安徳寺ミツルの声そのものだった。

そしてその声はそれ以来、二度と聞こえてくることはなかった。ひょっとしたら、このことを俺に悟らせたのも彼だったのかもしれない。

れない。

「パパっ！」

振り返ると美香がことみの手を引いてこっちに歩いて来るところだった。どうやらスーパ－の買い物から帰宅途中らしい。

「ママにおやつ買ってもらったかい？」

「うんっ」ことみが選んだの。ママが一個だけって」

「そっか。ことみは何を選んだのかな？」

「んとな、さきいか」

（ノー！）ノコケツ！！　なんで俺の好物を…（^□^；A

とにかくこの先もどうなるかわからない。

俺もことみもなぜ以前の記憶が消えないのかもわからない。

一抹の不安は確に残る。でも俺たちは与えられた運命をまっとうするしかない。

何度生まれ変わっても、あるいは途中で人生が途絶えても。

そしてこのことは、俺とことみだけの永遠の秘密なのだ。

（完）

エピソード（後書き）

最後まで読んでいただいております。ほんの一言でも感想をいただけたら嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2969b/>

ことみの中のこういち～改訂版～

2010年10月10日20時08分発行